

リリスパ PHOENIX

ファルメール

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

政令指定都市・空崎市の裏側で激しくぶつかり合う二つの力、「ツキカゲ」と「モウリヨウ」。その戦いに、一人の女性が介入する。

# 目次

で  
ら  
れ  
る

第01話	盲目の女	1
第02話	Wasabiにて	10
第03話	四霊・鳳凰	18
第04話	任務と任務の間に	28
第05話	鳳凰の技	38
第06話	鳳凰VSツキカゲ	47
第07話	テレジアと鳳凰	59
第08話	ツキカゲからの申し出	
71		
第09話	鳳凰の教え	83
第10話	会談前日	93
第11話	子守唄(リラバイ)は静かに奏	



## 第01話 盲目の女

体を苛むのは、付けられた傷の痛み。

一日一度の食事は、固いパンと薄いスープだけで必要なエネルギーを摂取出来ているとはとても言えない。これは人質である自分に余計な行動を起こしたり、余計な事を考えたりする体力・気力を付けさせない為の処置であると子供の頭でも分かった。

エアコンなど当然付いていない部屋は、昼は暑くて夜は寒い。毛布など与えられる訳もなく、それもまた自分を削っていくのがはつきりと分かる。

もう、この部屋に入れられてから何日が過ぎたのか、判然とはしない。

固く閉ざされたたった一つの入り口は、何十時間も開いてはいない。

「ハツメ……ハツメ……ハツメ……」

思考が既に、正常には働いていないのが自分でも分かった。

頭の中は霞が掛かったようで、ずっとはつきりしていない。

体を起こす力すら無くなって、ぼんやりと扉だけを見ていた。

そんな時間が何日も、あるいは一週間も続いたのかも知れない。それは、唐突に終わ

りを告げた。

「な、何だお前は!？」

「ぎゃあつ!!」

「おい、止まれ!! うわつ!!」

「?」

扉の向こうから何色もの悲鳴や怒号、それに争う物音が聞こえてきて、しかし数十秒でそれは静かになった。

カチャカチャ……

鍵を開ける音がする。

「……」

後ろ手に縛られているから殴り掛かる事は出来ない。ならばドアが開いた瞬間に体当たりをかまして、向こう側にいるヤツが怯んだ隙にここから逃げようとして……

しかし、満足な食事も与えられず劣悪な環境で放置され、しかも気まぐれに振るわれる暴力によつて体力を削ぎ落とされていた悲しさ。体は思うように動いてくれず、床でもがいている間に扉は開ききつて、部屋に人が入ってくる。

「……良かった。無事……とは、言い難いけど。生きていますね」

安心しきつたような声が、頭の上から降ってくる。

「……」

右目は殴られ腫れ上がって塞がっている、左目を使ってこの人間を観察する。自分よりはずっと年上だろうがそれでも成人はしていないだろう、十代半ばぐらいの少女だ。

さらりとして、それ自体が光を帯びているように艶やかな金砂の髪が腰まで伸びている。この国ではあまり浸透していない宗教のシスター服に身を包んでいて、胸元には十字架がぶら下げられていた。

顔立ちも整っていて、今迄自分が見てきたどんな女性よりも綺麗だと思った。額にはピンディーが付けられている。その両目は、眠っているように閉じられていた。

そつと手が伸ばされて、思わず体を竦ませてしまう。

目を閉じたままなのに、この少女はびたりと動きを止めた。

「大丈夫、怖がらないで。あなたを助けに来ました」

「……」

今度は止まらずに両手が差し出されて、優しい手付きで抱き上げられる。

敵意は感じない。畏か、騙しているのかとも思ったが、すぐにそんな必要など無いだろうと考え直した。

信じられないけど、この人は本当に自分を助けに来てくれたのだと分かった。

安心して、とろんと瞼が重くなって眠ってしまったし、まいそうになる。でも、その誘惑に抗って目を開ける。眠りに落ちる前に、伝えなければいけない事があった。

「お願い。もう一人助けて。友達なんだ」

「……」

女の人は、少し困ったように間を置いて、首を振った。

「……残っていたのは、あなた一人でした。多分、買われたのか身代金を払って解放されたのか……」

「そんな……」

「……兎に角、まずはあなたの事ですね。傷も酷いし衰弱も著しい。今は、眠りなさい。お友達を探すのは、その後でも遅くはないでしょう」

「……あなた、は……誰……」

「私はすぎ……いえ、鳳凰。鳳凰と、そう呼んでください」

「ごめんなさい、少しよろしいですか？」

「ん？」



政令指定都市・空崎市。

この日、いつも通り駅前で弾き語ろうとお気に入りの場所へと足を進めていた八千代命は、不意に後ろからの声に足を止めた。

振り返って見るとそこに立っていたのは、二十代半ばくらいの女性だった。

艶やかできめ細やかな金髪は膝裏まで伸びていて、180センチは軽く越えるすらりとした長身を、シスター服に包んでいる。

端正な顔立ちで額にはビンディーを付けていて、両眼は閉じられていた。

「どうしたんです、お姉さん？」

「申し訳ありませんが空崎グランドホテルへは、どう行けば良いかご存じですか？ 私、

この通り目が不自由なもので……」

「あ……」

この女性の目は閉じているのではなく閉ざさされているのだと分かって、命は少し姿勢を正した。

「ああ、それなら……ん……言葉で説明するのも面倒だし、連れてってあげますよ。さ、こつちへ……あれ？」

女性の右手を取ろうとして、左手にはバイオリンのケースが握られているのに気付いた。

「どうかされましたか？」

「いえ、お姉さんも音楽をするんですか？」

「そう言うあなたも、ですね。ギターを持つてる」

確信のある口調でそう返されて、命は穏やかな驚きを見せる。

「え、何で……」

「何で見えてないのに分かったか、ですか？」

「う、うん……」

「匂いですよ。ギターに使われる木材の匂いと、革製のケースの匂いがしますからね」

「はあ……」

少し驚いたが、自分達の新しい仲間も鼻や舌が鋭いのがストロングポイントだし、そんな人も居るだろうと思ひ直す。五感のどれか一つが衰えると他が鋭くなるって話も聞いた事があるし。

と、ここで、命の頭に一つのアイディアがよぎった。

「お姉さん、時間に余裕はありますか？」

「うん？」

「これから駅へ弾き語りに行くんですけど、どうです？ 同じ音楽をやってる仲間として、デュオでもやってみませんか？」

「……」

その女性は少しぼかんとした顔になったが、すぐにふつと微笑を見せた。「そうですね。中々こんな機会も無いですし。ご迷惑でなければ」

結論として、この臨時のユニット結成は大成功だった。

女性が奏でるバイオリンの妙なる響きは、初めて合わせるにも関わらず、完全に命のギターにびったりとくっついてきて、普段よりも音をずっと良くしてくれた。

ギヤラリーも、いつもの倍か3倍は集まったようだった。

曲が終わって、常よりもずっと大きな拍手が巻き起こる。

「どうもどうも、今日はありがとう〜」

命はいつも通り気さくに挨拶して。

「……」

女性は一流のバイオリニストの様に、堂に入った風に優雅に一礼してみせた。

数分して客が解散すると、命は女性に駆け寄ってその手を取った。

「すっごいですね、お姉さん!! もしかしてプロの人だったりしますか?」

「……いえ……これはあくまで趣味ですよ」

「そうなんだ。でも凄い良かったですよ!!」

興奮冷めやらぬといった様子で、命はおひねりを集めながら撤収の準備を進めていく。

「ところで、命さん」

「はい?」

「この子を、見た覚えはありますか? 私、この子を探しているのです」

「んん?」

差し出された写真を覗き込んで……

「!」

この女性は盲目だから驚いた所で見られる心配は無いが、しかし命は普段の習慣からポーカーフェイスを保って、心の動きが顔に出るのを防いだ。

「……………」

写っていたのは、十歳ぐらいのやんちゃそうな中国系の少女だった。命にとってはつい先日から、見知った顔である。

「命さん?」

「いやあ、すいません。見覚えは無いですね」

「……………ふうん……そう……ですか」

女性はそう言つて、写真を懐に仕舞つた。

「今日は楽しかったですよ、命さん」

「命も楽しかったよ、それでお姉さん。お姉さんのお陰で沢山お金も入つたし、良かったらこの後食事でもどう？ 奢るからさ」

「……そうですね、少しお腹も空いてきましたし、ではお言葉に甘える事にします」

「よしつ、決まりだね」

命はそう言つて、女性の手を取る。

相手が盲目なのを考慮に入れてぐいぐい引つ張るのではなく、ぶつかつたりしないよう丁寧に注意深く、エスコートしていく。

と、そうした所で命は一つの事に気付いた。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかつたよね。命は八千代命、お姉さんは？」

「……凰（ファン）。私は、ファンです」

## 第02話 Wasabiにて

「着いたよ。あ、ここ段差があるから気を付けてね」

「……良い匂いですね。カレー屋さんですか？　ここは……」

命が紳士の如く手を引いてフアンをエスコートした先は、彼女の推察通りカレー屋だった。

表の看板には「Wasabi」とある。

「さ、入った入った」

「あ、命ちゃん。いらつしやい」

出迎えた店主のカトリーナに、命は（盲目なので見られる心配は無いがそれでも一応）フアンから死角になる位置で目配せをする。カトリーナも晴眼者が見ても不自然でない程度に、軽く頷いて応じる。

実はこのWasabiというカレーショップ、地下に存在する私設情報機関ツキカゲの秘密基地への入り口の役割も果たしているのである。当然そういう場所なので、ツキカゲのメンバー達の活動拠点の一つでもある。そして何を隠そう命もまた、ツキカゲに

所属するスパイの一人なのだ。

駅前での弾き語りは勿論趣味もあるが、スパイとしての情報収集も兼ねていた。

そしてファンが心当たりは無いかと差し出してきた写真。そこに写っていた少女は、先の任務で遭遇、交戦した傭兵の白虎だった。彼女は現在はツキカゲの手によって拘束され、摂取していたらしい特殊な薬物による後遺症の有無などを調べる為に秘密基地内で軟禁状態、雑用係として基地の掃除をさせられている。

白虎から得られた情報では彼女は村人が丸ごと戦士という傭兵集団「桃源村」の出身であるとの事だったが……

このタイムミングで、白虎を探しにやって来るといふ事は……ファンもまた、桃源村の戦士もしくは関係者なのだろうか？

命がそう考えるのは必然の推理と言えた。

ここへの道すがら、こっそりツキカゲのメンバーに連絡を入れており、店の一角にある奥まった席ではファンと命のやり取りを、既に集まっていたメンバー達がじつと注視していた。

「さ、どうぞどうぞで」

「ああ、大丈夫ですよ。お気遣いなく」

命が引いた椅子に誘導しようとするが、しかし目が見えていないとはとても思えない

ような滑らかな動作で、ファンは着席した。

「さて、何を頼みますか？ あ、命はドライカレーで」

「私は……」

「あ、ごめん、命がメニューを読み上げるから好きなのを……」

「大丈夫ですよ。メニューはこれですわね？」

そう言つてファンは立てかけてあつた献立表を手に取ると、文字にそつと指を這わせた。

「……ベーコンカレーにハンバーグカレー……じゃあ、私はカツカレーをお願いしますね」

「……………」

目を丸くして、驚いた様子の命。カトリーナも「まあ」と同じような反応を見せる。

表情は見えないが、会話の流れが途切れたので何かおかしいと感じたのだろう。

「命さん？」

ファンが首を傾げて尋ねてくる。

「ん？ あ、ああごめん。でもちよつとびつくりしつちやつて。ファンさんは指で文字が読めるの？」

点字を読む人は時々見るが、印刷された文字を指先で読む人は初めて見た。



「ええ、私は目が見えない代わりに他の感覚が鋭くてね。インクを吸っている所は、紙の厚みや感触が変わっているからその違いを指先で読み取るのですよ」

「はえ〜」

感心した表情になる命。しかしすぐに、面白い悪戯を思い付いた子供のような表情になつた。

「じゃ、じゃあこれは？」

サインペンを走らせた紙ナプキンを差し出す。ファンはそれに指を走らせた。

「丸印の中に、命と書かれていますね」

「あ、当たった……つ、次!! これは？」

興奮した命は今度は持っていた鞆から漫画本を取り出して、開いたページを差し出した。

「……野球漫画、それも見開きで……これはホームランを打っているシーンですね。背番号は31、選手が右ページで左ページは放ったバットが描かれていますね」

「当たった……凄いですね、ファンさん……」

「ふふ……まあ、日々の鍛錬の成果ですよ。今は電子書籍で同じ事が出来ないかと、練習している所です」

そんな風に話し込んでいると、カトリーナがオーダーしたカレーを運んできた。

「おまちどおさま」

「さ、命の奢りだよ。遠慮しないで」

「いただきますね」

そうしてカレーに舌鼓を打つ二人。

十数分して皿を綺麗に空にして、食後のお茶を楽しんでいる所で命が切り出した。

「そう言えばファンさんは、空崎へは仕事で？ それとも観光かな？」

「……ええ、仕事で。取引先との打ち合せをしに来たのですよ」

当たり障りのない回答が返ってくる。命としては恐らくは桃源村の関係者であるファンからは、少しでも情報を引き出した所ではあるがしかし会ってすぐなのにそこまで突っ込んで聞くというのも不自然である。話題を変えて白虎について聞く事にした。

「写真のあの子は、知り合いなんですか？」

「ええ、仕事仲間の子供でしてね。少し前からこの町に来ている筈なので、仕事でこちらに来たついでに会えないかなと思っただのですよ」

「……」

開示された情報から、背後関係を推理する命。

仕事関係……桃源村は傭兵稼業が主産業。その関係？

取引先……モウリヨウ？

打ち合せ……白虎が失敗したから、新手の傭兵を送るようにとモウリヨウから要請があった？

白虎が仕事仲間の子供……桃源村は村人全員が戦士だから、年齢的にも仕事仲間の誰かの子供というのは辻褃が合う。

いずれにせよ、この場ではこれ以上情報を引き出すのは無理だろう。それにまだ、ファンが自分達の敵と決まった訳でもない。

ここは、一旦距離を置いてじっくり様子を見る事にしよう。

初芽に偵察用のドローンを飛ばしてもらおうようにサインを送る。忍者の訓練を受けたカエルであるカマリを服に忍ばせる案も考えたが、先程見せたファンの敏感な触覚を思い出す。あれが指先だけでないとしたら訓練を受けた兵士が銃の重さから残弾数を把握するように、着衣の微妙な重さの変化や違和感から発見されるかも知れない。そうすれば、みすみすこの Wasabi がツキカゲの関連施設だと情報を与えるようなもの。ここはこれが最適解だろう。

初芽が領いたのを目の端で捉えると、命はファンの手を引いて空崎グランドホテルへと歩いて行った。

「ここまで来れば大丈夫ですよ。命さん、ありがとうございます」

「今日は楽しかったよ。命はよく駅前で弾き語ってるから、良かったらまた来てよ。また一緒にデュオでもやろうよ」

「ええ、その時は是非……」

ホテルの入り口で命と分かされると、従業員に案内されて宿泊している部屋へと移動する。

決められた回数ของ ロックを交わすと、ロックを外す音が聞こえてドアが開けられる。

「ファンさ……いえ、鳳凰様。連絡をいただけただけなら私が迎えにうかがったのですが」

出迎えたのは、中東風の服に身を包んだ銀髪と蒼い瞳、褐色の肌をした少女だった。

「良いですよ、テレジア。それに、寄り道したお陰で思わぬ情報も手に入りましたし」

「は……情報、と言うと白虎のでしょうか？」

「ええ……この街の、Wasabiというカレーショップなのですが……」

テレジアはファンの言葉に素早く反応して、机の上で起動させていたノートパソコンでWasabiの情報を検索した。食ベログでの評価は3.6とある。

「あそこは、ツキカゲかモウリヨウの関連施設ですよ。どちらかは……まだ分かりませ

んが。少なくともあそこに入入りしている人間の中で店主を含めて7名までは、白虎の事を知っています。彼女の事を聞いた時、八千代命という方や、離れて座っていた5人、それに店主の心音に、通常とは違う反応がありました」

奥の席に着いていた5人の中で一人だけは、何やら嫉妬や怒りの心音を常に鳴らしていたが、それについてはファンは言及しなかった。

「……では、どうします？ 予定を変更して、そのWasabiという店に殴り込みますか？」

テレジアの提案に、しかしファンは首を横に振った。

「もしあのWasabiという店がツキカゲかモウリヨウの重要拠点なら、襲撃を掛けたら想定以上の戦力が待ち構えているかも知れない。ここは予定通り、末端から切り崩していきましょう。今夜、調べておいたモウリヨウの関連企業に襲撃を掛けます」

## 第03話 四霊・鳳凰

「美味しい。凄いな。初芽はこんな美味しいもの作れるのか!!」

Wasabi店内にあるエレベーターから通じる場所には、それが地下のものとは到底信じられないような、ひとつの町を思わせるような大きく明るい空間が広がっている。

空崎市を拠点とする私設情報機関ツキカゲの秘密基地である。

その広間では、昼間にファンが見せた写真に写っていた少女が、ケーキとリンゴジュースを前に目を輝かせていた。

「うふふっ」

感想を受けて、青葉初芽は顔を綻ばせる。

「つて、違う。私はこんな事してる場合じゃないんだ!! もう私の体の検査も終わっただろ。桃源に帰るぞ」

と、言いつつパクリとケーキを口に運ぶ。

「帰る場所は無いわ」

「むっ」

引き戸が開いて、少女達が入ってくる。

半蔵門雪、八千代命、石川五恵、相模楓、源モモ。

これに初芽を加えた6名が、現在のツキカゲのメンバー総員だった。

「帰る場所が無いとはどういう事だ？」

「あなたの故郷の村でお触れが出された。白虎……本名・ファン・イエナイエン、任務に失敗した者は不要である」と

それを聞いた白虎の表情が、受け入れがたい恐怖の色に染まった。

「そんな……嘘を吐くな!!」

「……」

すつ、と雪がスマートフォン画面を見せる。そこには中国語で文章が表示されていた。

「あつ……これは桃源の連絡網……」

そこに書かれていた内容は雪の証言と一致していた。

ファン・イエナイエンは任務遂行能力不足と見なし、四聖獣の称号を剥奪、桃源から永久追放とする。

そう書かれていた。

白虎は、がっくりと膝を落とす。

「そんな……私、捨てられたのか……」

「自分の立場を知っておいた方が良い。自分自身の為にも。桃源は任務を遂行出来ない者に容赦が無い。だからこそその、任務遂行能力の高さなのよ」

「私達が一緒に居ます」

うずくまつてしまった白虎の背を、初芽は優しくさすつてやった。

「それでさ、聞きたい事があるんだけど……」

「ここで、命が前に出た。」

「この人に、見覚えはない？」

「？」

白虎に写真を差し出す。そこには昼間、Wasabi店内に仕込まれたカメラで撮影されたファンの姿が移っていた。

その姿を認めた瞬間、白虎の目の色が変わった。

「ここ、これは鳳凰様!! なんで鳳凰様がここに……いいや鳳凰様なら私を助けてくれる!!」

「……鳳凰? あの人は凰(ファン) って名乗ってたけど……どんな人なの?」

五恵が尋ねる。



「……む」

白虎はしばらく躊躇っていたが、やがて観念したように大きく息を吐いた。

「まあいいか、教えてやる。桃源は村人全員が戦士である天下無敵の傭兵集団。その中でも強い者には、特別なコードネームが与えられるんだ。私みたいにな」

「……そうね、私達は以前にも四聖獣の一人、青竜と交戦した事があるわ。部下も含めて、全員が相当な使い手だった」

雪が、左目を細めて語る。

「そんな事が……」

「まだ五恵ちゃんや楓ちゃんがツキカゲに入る前の話ですよ」

「続けるぞ？ 桃源村で使われているコードネームは四聖獣の他にもいくつかあるが……その中でも、応龍・麒麟・鳳凰・霊亀の4つ、『四霊』は最上位の称号。相応しい実力を持った者にしか与えられない。だから四霊の座には何十年も誰も就いていなくて、十年ぐらい前に鳳凰様が当時の朱雀から昇格してからも、他の三席は空位のままなんだ」

『……まるで五恵つちが来るまで空位が続いていた、ツキカゲの横綱ランクみたいだねえ』

これは命の心中である。どこの組織にも、同じような状態は存在するらしい。

「そして四霊には、いくつかの特権が認められてるんだ」

「特権って言うと、具体的には？」

「まず、村を通さずに個人で依頼を受けて良い権利。それに村の上層部からの命令に対する拒否権。それと上層部の決定を自分の意志一つで撤回させる権限もあった筈だぞ」  
「な、何それ……いくら実力があるからって、よくそんな滅茶苦茶な権利を与えるわね……」

呆れたように、楓が肩を竦める。しかし彼女の反応も尤もである。

組織を通さずに個人で依頼を受けるという事は、当然ながらその依頼による利益は組織に還元されない。

そして命令の拒否権と、組織の決定を個人の一存で撤回させられるなど、そんな人間が一般の会社に居ればその会社は滅茶苦茶になってしまっただろう。

だがこれで先程の白虎の反応も理解出来る。白虎は鳳凰が、その権限を使って里からの追放処分を取り消しにして自分を迎えに来てくれたと思っただけなのだ。

一方で、雪の感想は楓とは違っていた。

「それは、逆ね？」

「……逆、ですか？」

「師匠、逆って言うと……？」

「確かに、それらの権利を一個人に与えるなど滅茶苦茶……けど、裏を返せば桃源の上層部はそこまでの自由・特権を許してでも、彼女……鳳凰を敵に回したくないと思ってるという事よ」

「……な、成る程……」

感心したように、モモが息を呑んだ。

「後は確か……鳳凰様は他の村の者とは違って、自分で会社を経営していた筈だが……」  
白虎のその呟きに、雪は頷くと持っていたタブレットを机に置いて全員に見えるようにした。そこには、中国語のホームページである会社の紹介記事が書かれていた。

モモには中国語は読めないが、辛うじて社名は読み取れた。

「……風警護?」

「桃源の関係者、そして風（ファン）という名前から調べてみたのよ。十年程前に設立されたP M S C s（民間軍事警備会社）で彼女、ファン……本名・鳳愛音（ファン・アイイン）はその社長となっているわ」

「P M S C s……って言う……師匠……」

五恵の問いには、初芽が答える。

「以前にはP M Cとも呼ばれていましたね。五恵ちゃん、傭兵というと、どういふのを想像しますか?」

「…………それは、特定の国家や組織には属さずに、お金で仕事を受けて戦う人…………ですよね？」

「ええ、それが傭兵ですね。基本的に実際に戦闘するのが専門です。それに対してPMCやPMSCsが担当するのは軍事に関係する事全般。つまり実戦は勿論、要人・施設の警護や兵站システムの構築、軍隊の訓練をしたりもするんです」

「実際に、この鳳警護の活動内容には政治家の護衛や重要施設の警備、大統領から名指しの依頼による新興国の軍隊の訓練などが挙げられているわ。他にも、武装解除や動員解除、それに少年兵の社会復帰のサポートを主な業務にしているわね」

「だ、大統領から指名されるって…………」

「あれ…………いい人なんじゃ…………」

話の内容を聞いていた楓とモモが、それぞれ感想を漏らした。

「ん…………鳳凰様は、麻薬とか人身売買とか、そういうのは任務に関係無く物凄く嫌われるぞ。よく、その手の組織をぶっ潰しては捕まっていた孤児を連れ帰ってきていた」

「…………まさか、そうやって連れ帰ってきた子供を桃源の戦士として育てるとか…………？」

命が恐る恐る口にしたその言葉には白虎が首を横に振った。

「いや、そうやって連れ帰ってきた子供はみんな、学校に送られていたな」

そうやって「あ」と思い出したような顔になった。

「一人だけ、確か鳳凰様が四霊になったばかりの頃に連れ帰ってきた子供だけは違っていたつけ。私もあまり話した事はないけど、それっだけは弟子兼秘書として、今でも傍に置いている筈だ」

「ふむ……」

「しかし、彼女の目的が白虎を桃源に連れ帰る事だとすると、事態は容易ではないわね」  
「!!」

雪の言葉を受け、全員の視線が彼女に集まった。

「どういう事ですか、師匠」

「いくら彼女に上層部の決定を撤回させる特権があろうと、それだつて無制限ではない筈。それなりの落とし前と言うか見返りは、組織に提示する必要がある」

これは道理である。特権とは先程雪が言った通り、それを与えるデメリットをその人間が組織に還元するメリットが上回っているから与えられるのだ。特権を行使するには、それに見合った利益を組織にもたらさねばならない。

「この場合、最も分かり易いのは……白虎ちゃんが無かった任務、ツキカゲの抹殺を彼女、鳳凰が引き継ぐという事ですか」

「!!」

全員の顔に緊張が走った。

「じゃあ、あのファンさんは命達を倒す為にやって来たって事？」

「可能性の問題よ。でも、備えは必要だと思う」

「止めておけ」

と、今迄見た事も無いほどに神妙な表情で白虎が言った。

「あの人は伊達に何十年も空位だった四霊の称号を持っている訳じゃない。この中で一番強いのは……」

白虎の視線が6人の間を移動して、そして五恵に止まった。

「お前だな」

「え、ええまあ……」

照れたように、五恵が頷く。

「だが仮にお前が百人居て束になった所で、鳳凰様には絶対に勝てない。あの人と私達では、そもそも立っている土俵が違うんだ」

その日の夜、空崎市沿岸部の工場地帯。

立ち並ぶコンテナによって迷路のような様相を呈したその場所は、今は静謐であるべ

き夜の空気には似つかわしくない物々しさが取って代わっていた。

コンテナ内に隠されていた百体近いロボット、軍事人形がずらりと起動状態で並んでいて、それらに内蔵されているあるいは手持ちの重火器は、全てが包囲網の中心に立つた一人の人間へと向けられている。

このコンテナを所有している会社はモウリヨウの末端に位置しており、軍事人形の輸出入を行う幾つかのルートの一つであった。

「さて……白虎の情報が手に入ると良いのですが……」

一発でも当たれば体が消し飛ぶであろう火力に囲まれながらも、包囲されているその人物、鳳凰は泰然とした態度を変えない。

圧倒的な戦力で包囲して、絶対の勝利を確信しているであろうこの会社の社長は、怯える様子も無ければ命乞いもしない、その余裕が気に障ったようだった。

「撃てっ、撃てっ!!」

ヒステリックに唾を飛ばしながら、命令を下す。

軍事人形達が装備する銃口が全て鳳凰に向けて……

「ふ」

鳳凰の口の端が、不敵に歪んだ。

## 第04話 任務と任務の間に

「これは一体……」

モモは、戸惑いと困惑を隠せずにキョロキョロと視線を動かした。

彼女の他にも、ツキカゲの現構成員全てが、この空崎市沿岸部工場地帯に集まっていた。

今回のターゲットはある輸入会社である。

この会社は裏でモウリヨウと繋がっていて軍事人形の輸出入を行っているとの情報が入り、つい先日にもその裏も取れた。

空崎の平和を守る事こそが、ツキカゲの存在意義。早速この会社を潰す為に乗り込んだツキカゲ達であったが……

乗り込んだそこに広がっていたのは、彫像の如く機能を停止した無数の軍事人形と、ぐるぐる巻きの雁字搦めに縛り上げられて気絶している社長以下密輸会社の社員達だった。ご丁寧に彼等の傍には、軍事人形を初めとする違法な品物を輸入した記録とその金の流れを記した台帳まで添えてあった。



「私達の手口とそっくりですね……」

楓が、状況を検分しつつ感想を口にした。

「それにしても、ここで一体何が起こったんだろうね？」

と、命。

確かにここで何か、恐らくはツキカゲの前に殴り込みを掛けてきた者あるいは者達が居て、ゴタゴタがあったのは疑う余地は無いが……

それにしてもこれは状況が異様だった。

数えるのが面倒になるが、目算で百体は居るだろう軍事人形はどれも、手持ちもしくは内蔵重火器を照準して発射寸前という状態で機能停止している。しかもロボット達は、ぐるりと円を描くように配置された形で動きを止めていた。明らかに包囲網を敷いていた形だ。つまりこれらの軍事人形達が動いていた時には、この円の中心に何者か……恐らくは侵入者が居たと考えるのが自然だ。

これらの状態から何が起こったのかを想像すると……

ここにツキカゲの前に殴り込みを掛けてきた『何者か』が発見されて、軍事人形が迎撃の為に起動する。軍事人形達は侵入者を取り囲んで一斉射撃を仕掛けようとしたが……その時『何か』があつて、いきなり機能が停止した。と、いう事になる。

「……でも、そんな事が有り得るの？ 局」

「ううん……考えにくいですね。旧来の機体なら司令塔のコンピュータが制圧されたとかで説明は付きますが、このタイプの軍事人形は新型で、コントロールからの信号が途絶しても事前に組み込まれたプログラムに従って、ある程度自律的に戦闘行動が可能なタイプですから……記録された映像や音声で何かが分からないかと思つたんですが……ダメですね。電子機器が全てクラッシュしています」

「師匠、それに妙ですよ」

軍事人形の外装を調べながら、五恵が言った。

「ここにある軍事人形にはどれも殴つたり斬つたり、あるいは銃撃を受けたような傷がどこにもありません。完全に無傷のまま、全ての機体の機能が停止しています」

「あ、それはこつちの人達もだよ」

「師匠、こつちの社長さんもです」

社員達を調べている、楓とモモが言った。

「この人達の体の何処にも、打撃や斬撃、あるいは麻酔弾や注射で薬を打ち込まれたような形跡がありません」

「それだけじゃないわよ、百地」

と、雪。

「えっ」

「周りを良く見てみなさい」

「まわ、り……?」

意味を図りかねたように、モモは視線を動かした。

数秒しても答えが分からない彼女に、命が助け船を出した。

「そもそも弾痕とか壁の凹みとか、周囲に争った形跡が見られないって事だよね、半蔵」

「そうよ」

「あつ……」

「常に周囲に気を配って、視野を広く持ちなさい。それで一つしかない命が、少しでも守れるわ。覚えておくように」

「はい、師匠」

現場での臨牀講義を受け、モモが深く頷く。命はそんな師弟関係を見て「うんうん」と頷いていたが、すぐに周囲に視線を戻して難しい顔になった。

「しかし……だとすると尚更、ここで何があったのか分からなくなってくるねえ……」

侵入者がいて、会社側がその侵入者を発見、取り囲んだ所までは間違いない。

だがその侵入者は軍事人形にも人間にも指一本も触れず、十数人の銃で武装した人間と百近い軍事人形を無力化してしまったのだ。しかも争った形跡が見られない事から、恐らくは一瞬の内に。

「誰が……？ 一体、どんな方法で……？」

「鳳凰の仕業だな、間違いない」

空崎市内・九天サイエンス本社ビル・ソラサキマリエン内の一室。

九天サイエンスは表向きは大手の製薬会社であるが実際にはモウリヨウが経営しており、特にこのビルは極東に於けるモウリヨウの根城となっている。

文鳥を手に停まらせた女のその言葉に、彼女の前に表示された無数のホログラムが揺れた。

〈何と……まさか彼女が!!〉

〈伝説の傭兵……〉

〈あの鳳凰が……!!〉

この部屋に中継されているのは世界各国のモウリヨウの幹部だ。

だがアメリカやロシア、インド、エジプト……世界各国あらゆる支部の幹部達の中で『鳳凰』の意味が分からない者は一人も居なかった。彼等の中でその名前は国境を越えて絶対のものであったのだ。

〈確かなのかね、天堂君〉

「無論だ」

ホログラムの一つからの問いに、天堂と呼ばれた文鳥の女は頷いた。

〈そこまで言うからには、何か証拠でも?〉

「いや」

〈何?〉

「痕跡は何一つとて残っていないかった。こちらが感心するほどにな。しかしだからこそ、逆説的にだがヤツの仕業である事が確信出来た」

〈どういう事かね? もう少し分かり易く説明してくれたまえ〉

「簡単な事だ。ヤツの、鳳凰の仕事は絶対に証拠を残さない。具体的にどういうトリックを使っているのかは私にも計り知れないが、ターゲット以外には傷一つ負わせずにかも信じられない程の短時間で無力化してしまうから目撃者も出ない。監視カメラやマイクのような記録機器も、データが全て破壊されて痕跡を残さない。ここまで完璧にやるのは、やれるのはヤツしかいないという事だ」

〈むう……しかし何故、桃源が? やはり例の一件かね?〉

先日、桃源の傭兵である白虎がツキカゲと交戦して彼女は敗北、ツキカゲに捕獲されてしまった。

白虎には強い恐怖に反応して記憶を消去する九天ゼリーを飲ませたからこちらの情報漏れる心配は無い。

そして桃源には白虎は任務に失敗したと連絡を入れている。

事の善悪はさておき、今回の一件でモウリヨウが桃源に襲われる理由は無い。寧ろこの場合は、桃源が任務失敗の責任を取る為に追加の戦士を派遣するなどして然るべきなのだ。なのに何故、桃源の戦士にモウリヨウの関連企業が攻撃を受けるのか。

「私のカンだが……桃源はこの件には関与していない。これはヤツの独断だろう」  
「……どういう事かね、天堂君」

「ヤツが薬や人身売買、武器密輸を嫌うのは有名だからな。我々は、ヤツに信用されていない。白虎の件も、我々の報告を信じていないのだろう」

「ではどうするかね？」 桃源に彼女の独断専行を抗議して、責任を取らせるか？  
「無駄だ」

文鳥の女は、一言で切って捨てた。

「先程も言った通り、証拠が何一つも無い。勿論、これは絶対に鳳凰の仕業だが我々の言い掛かり、でつちあげだと言われるとこちらには返す言葉が無い。そして桃源にもメンツがあるからな。最悪の場合はお互い引くに引けなくなつて、我々極東支部と鳳凰が指揮する桃源との全面戦争にまで発展する可能性すらある。そうなれば最終的に勝つの

は我々にせよ、負けたも同然の被害が出る事を覚悟せねばならん。あの女、鳳凰はそれを全て承知の上でやっているのだ。我々が戦争に踏み切れない事も含めてな」

「正気の沙汰ではないな。自分が切られるとは思っていないのか？」

「思っていないさ」

文鳥の女は断言した。

「現存する唯一人の四霊であるヤツは桃源で並ぶ者無き最強の戦士。そしてP M S C sの経営によってヤツが桃源にもたらしている利益は計り知れない。更に単純な暴力装置である他の桃源の戦士と違って、ヤツにはP M S C s経営のノウハウがある。つまり実力・実績・希少性……全て兼ね備えているヤツを、我々から訴えがあったからと言って理由も無く排斥するほど桃源は愚かではない。他ならぬヤツ自身が、それを分かっているのさ」

「むう……では、どうするのかね？」

「ゲツカコウを控えている今、あまり事を荒立てたくはない。ツキカゲの事もあるし、ひとまずは準備を整える為の時間稼ぎをさせてもらおう。囹を立てる」

文鳥の女がすつと指を動かすと、空間にディスプレイが浮かんででつぷりと太った壮年の男の、バストアップの写真が表示された。

ホログラムの先に居る者達の中で、何人かは彼の顔に見覚えがあった。

エモ・パチーノ。横浜にあるイタリア系シンジケートのボスだ。

「こいつに、我らモウリヨウの傘下に入ってもらおう。鳳凰はともかくツキカゲはその存在理由の為に、こいつには飛びつくだろうさ」

空崎ブランドホテル、最上階のスイートルーム。

そこでは、机に向かったテレジアが難しい顔でノートパソコンと睨めっこしていた。「どうですか、テレジア。白虎の情報は見付かりましたか？」

後ろから、見えないが覗き込むような姿勢を取っているのは鳳凰だった。

「あ、師匠……いえ、残念ですがこの会社のデータには、それらしい記録は残っていませんでした」

「ふむ……残念、外れですか……」

視力を喪失している鳳凰であるが、他の四感が発達しているので晴眼者以上に物を見る事が出来る。が、それでも完璧ではない。

今回のようにモニターに表示される映像は、他の者が見なければならなかった。それが弟子兼秘書であるテレジアの役目である。



「……考えたくはないですが、ツキカゲに……やられたのでは？」

テレジアは鳳凰を気遣ってか殺されたという言葉を避けた。

「……可能性はありますが、それはツキカゲらしくないですね。以前に青竜がやられた時も、彼女や配下の竜軍団は数日間の記憶を消されて警察に引き渡されるに留まりましたから……」

「は……では、モウリヨウに繋がっている者を何人かリストアップしてみました」

「その中で、一番位が高そうな者は？ 次はそこを当たってみましょう」

「はい、それでしたら……」

テレジアがキーを叩いて、画面を切り替えた。

「この男、エモ・パチーノが良いと思います。ハマのイタリア系シンジゲートのボス、最近モウリヨウの傘下に入っています」

## 第05話 鳳凰の技

ツキカゲによるエモ・パチーノのアジトへの襲撃作戦は、結論から言うつつがなく完了した。

連中がパーティーに興じている時、まずは先行した忍動物・アライグマのラツパがブレーカーを落として視界を暗闇に包む。

そうして電源が回復するまでの僅かな間、敵の迎撃態勢が整うまでの間隙を縫って最大戦力にて電撃的に強襲。奇襲作戦の基本にして奥義とも言える手法である。

加えてこのアジトに配置されていたのはそれなりの場数を踏んではいようが所詮はチンピラばかりで、専門的な訓練を受けた戦闘のプロフェッショナルが居なかった事も幸いした。視界が暗転し打撃音や悲鳴から襲撃があつたのを察した所で、あろう事か銃を弾いたので。敵よりも味方の方が多く、しかも視界が利かない状況で撃てば同士討ちになる事も分かっていない素人ばかり。

明かりが復活すると、そこにはマフィアの黒服達が累々と倒れていた。

「五右衛門は玄関を固めてたとして、私と百地が同じくらい倒したか。良い動きする

じゃないのよ」

少しだけ悔しそうな楓が、モモに賞賛を送る。

「やり遂げた!!」

「暗闇でもくつきり見える眼鏡を作った、局の功績ね」

「いえいえ」

初芽が謙遜気味に微笑する。

暗視装置に加えて、光量の変化には敏感に反応して光の増幅率を調節、急に明るい所に出ても目が眩まないスグレモノである。

「なんかもう、ここで百地の誕生会やれそうじゃない?」

敵戦力を無力化したとは言え、未だ敵地に居るとは思えないような気軽さで命が言う。

「え?」

「なに驚いてるのよ」

「今日が百地の誕生日なら、みんなで祝わないと」

「師匠がスペシャルカレーを作りながら待っていますよ」

「えつと……」

モモは少しだけ上目遣いになって、雪に視線を送った。

「スパイでもお目出度い事は、祝って良いのよ」

弟子の視線の意味を正確に把握して、雪は許した。

「みんな……ありがとう!!」

「それじゃあ……」

命がテーブルに置いてあったワイングラスを取って、高く掲げる。

勿論彼女は未成年だし、流石に敵地にあつてしかも敵地で用意された飲食物を口にするほど不用心ではない。これはあくまでも気分だけでも味わおうというものだ。

「ふふ……」

雪も同じように、ワイングラスを掲げる。ちらりと、部屋の隅にあつた柱時計を見ると時刻は午後11時55分。モモの誕生日が終わるまでには、ギリギリ間に合ったかと内心で少しだけ安堵する。

楓、五恵、初芽、そしてモモも同じようにワイングラスを手にしたのを見て取ると、命が音頭を取った。

「百地の誕生日に、乾」

「ゴーン、ゴーン……!!」

「杯」

「なっ!?!」

「はっ!？」

「え? あれ? ええっ!？」

柱時計が、電子的に再現された鐘の音を鳴らして午前0時を告げる。

先程までの、緊張感こそ保っていたがしかし和やかだったムードは、一瞬にして雲散霧消した。

反応が早かったのは、やはり雪、命、初芽の師匠格の3人だった。手にしていたグラスを放り出すと、得物を構える。構え終わった時に、やっと落ちたグラスが床に当たって割れて、自身が飛び散った。モモ、楓、五恵は状況の把握が十分ではなかったが、しかしそれぞれ自分の師匠がただならぬ警戒を示しているのを見て、自分達も警戒態勢に入った。

「気付きましたか?」

「うん。日が変わるまでには、後5分はあつた筈。なのにいきなり、鐘が鳴つた」

「私は見たわ」

雪に、視線が集中する。立ち位置の関係で、彼女は柱時計が視界の中に入っていた。

「11時55分を指していた筈の時計の針が、いきなり12時に飛んだの。そう見えたわ」

弟子達3人の表情が凍り付く。

「じゃあ、私達は5分ほど眠っていたって事ですか？」

「……ガスか、何かでしようか？」

「いえ……少し違うかも知れません」

初芽の視線が、先程投げ出されて割れて、床に転がっているガラスの破片に動いた。意識を取り戻した時、全員がグラスを持ったままだった。つまり、倒れたりしていなかったどころかワインを零しさえしていなかった。それに、意識が遠のくような感覚も息苦しさも、何も無かった。それどころか気を失ったという自覚すらも無く、シームレスに時間を飛び越えたようにすら感じた。それほど、眠気や目眩を感じて徐々に意識が遠くなるのではなく100から0に意識が無くなって、また0から100にいきなり回復したのだ。

「何の自覚症状も無く……体の筋肉が弛緩してバランスが崩れる暇さえ与えずに、意識を飛ばされた……？ しかも6人同時に、そんな事が……!？」

「モウリヨウの、新兵器でしようか？」

言いつつ、モモは雪と背中合わせになって互いの背後を警戒する。

「いえ、それはないでしょうね」

と、雪。命や初芽もその分析に頷いた。

もし、これをやったのがモウリヨウだったとしたら雁首揃えてしかも5分間も無防備

状態であつたツキカゲを放つておく筈が無い。その場合は今頃、良くて全員が囚われて  
いるか悪ければ皆殺しにされていただろう。これをやったのは、モウリヨウではない。

そこで、楓がはつとした顔になつた。

「師匠、これ、あれですよ!! 前の港で、会社が壊滅させられていたあれ!!」

「ん? あ、そうか!!」

命も、弟子の言葉を理解した。

きつとあの時、自分達が襲撃する前に何が起こつたのかと思つていたが……謎が一つ  
解けた。

殴り込んできた侵入者を取り囲んだ密輸会社の社長と社員は、その侵入者へ向けて一  
斉射撃を加えようとして……そうして、今の自分達と同じようにいきなり意識を飛ばさ  
れた。そして棒立ち状態になつた所を、ふん縛つて動けなくされたのだ。

「……と、いう事は……」

そしてそれは、同時にもう一つの事も明らかにしていた。

あの港で起きたのと同じ事が、今ここで起きているという事は……!!

下手人は、今ここに來ている?

「まさか……!!」

雪が弾かれたように駆け出すと、この大広間に幾つかある扉を蹴破つた。そして……

遡る事、数分前。

「師匠、データの吸い出しがまもなく完了します」

エモ・パチーノのアジトのコンピュータ室では、テレジアが素早くキーボードを叩いて情報を手持ちの端末に流し込んでいた。

背後では、いつも通りのシスター服に身を包んだ鳳凰が、バイオリンを弾いていた。しかし彼女が手にする楽器からは何の音も出てはいない。弓毛は弦の上を往復するだけだ。部屋に響くのは、テレジアがキーボードを叩く音と機械の動作音のみである。

「どうですか、テレジア。今回の首尾は……？」

「ええ、どうやら今回はアタリのようにです」

ここのボスであるエモはモウリヨウに加盟してまだ日が浅く、低ランクの権限しか与えられてはいなかったがそれでも末席とは言え幹部クラス、前の会社の社長のような末端の末端とは訳が違ってそこまで深い所までは潜れないが、ある程度の秘匿情報を閲覧する事は出来た。その中に、モウリヨウが最近雇った傭兵の情報があつた。

「どうやら、白虎の他にも雇っていた傭兵がいたらしいですね。えつと……これについ



ては、戻ってから精査しましょう。よし、100パーセント吸い出しが完了しました」  
「よろしい」

鳳凰が演奏の構えを解いて、何の音も奏でていなかったバイオリンを顎から放した。  
「ではテレジア、予定通り別々のルートで脱出します。後で落ち合いしましょう」

「分かりました。師匠、お気を付けて!!」

「あなたもね」

テレジアは、音を立てない走り方でコンピューター室から駆け出していった。

後に残った鳳凰は、盲目ながら杖も必要とはしないしつかりとした歩き方で帰路を進んでいく。

そうして、大広間にさしかかった時だった。

バン、と音を立てて部屋扉が開け放たれる。

「!!」

間髪入れず、鳳凰には見えないが中から人影が飛び出してきた。

ギイン!!

金属音が響く。

「!! お前は……!!」

「む……」

雪の刀と鳳凰の弓。

二つがぶつかり合って、  
空間に火花を散らせた。

## 第06話 鳳凰VSツキカゲ

「お前は……!!」

「……むう……!! ツキカゲ、ですか……?」

ツキカゲの現トップエージェントである半蔵門雪と、桃源最強の傭兵である四霊・鳳凰。

両者のファーストコンタクトは、互いの得物の激突であった。

刀とヴァイオリンの弓が、打ち合って火花が見えた。

雪と鳳凰は、申し合わせたように背後へと飛んで間合いを開けた。

たった一合であったが、それだけで二人は対手が並々ならぬ使い手である事を完全に把握した。

雪は脇構えを取って、刀身を隠して間合いを悟らせないようにする。一方で鳳凰は体を斜に構えて、雪の攻撃範囲を小さくした。その状態で、牽制するように弓を前に突き出す。

数秒の膠着状態。どちらも先手を打てずに動きが止まる。

それを破ったのは、この状況での鳳凰とツキカゲの差だった。

鳳凰はこのエモ・パチーノのアジトへは自分とテレジアの二人で潜入してきており、そのテレジアも先に脱出させている。対してツキカゲ側は、構成エージェント全員でこのアジトへと襲撃を掛けてきている。

「師匠!!」

雪が蹴破つて出てきたドアから、モモが走り出てきた。

「……百地!!」

「!!」

ほんの一瞬だけ、雪と鳳凰、二人の注意が眼前敵からモモへと移った。

そのモモの目に入ったのは、師匠である雪と明らかに戦闘状態で対峙している人物。

反射的に、専用スマートフォンを変形させた銃に睡眠用の麻酔弾を装填、鳳凰へと照準して発射。狙いは小さくて動きも激しく狙い辛い頭部ではなく、的が大きく外しても体のどこかには当たるであろう胴体部。

バシユ、バシユ、バシユ。

消音効果による空気が抜けるような音が鳴った。

当たった。

まだ新入りとは言えそれでも十分な訓練を積んできているモモは、着弾を確認するま

でもなくそう確信した。訓練で、上手く行った時と同じ感覚が手に走ったのだ。

だが、正確な狙いで発射された麻酔弾は一発も当たらなかつた。

鳳凰が、弓の握りの部分に付けられたトリガーを引く。

すると弓毛が振動するような音を立てて、赤熱化した。

そのまま、鳳凰は空間に赤い残像が残るほどのスピードで弓を振るう。

飛来した麻酔弾は、鳳凰に一発も命中しないどころか全て真つ二つに両断されて6つの破片が床に転がった。弾丸の切断面は、高熱に晒され融けて赤くなっていた。

「なっ……!!」

『出来る……!!』

雪は、この一連の流れで眼前敵への脅威評価を更に上方向に修正した。そして現在明らかになっている情報を、脳内で整理する。

鳳凰の武器は、ヴァイオリンの弓。棹（スティック）部分の材質は金属製で、刀とも打ち合える強度がある。弓毛の部分もワイヤーで作られている。恐らくは通電させる事で加熱して、電気を流した銅線が電熱で発泡スチロールを抵抗感無く融解して切断してしまうように、物体を融断させる機能がある。電気を使うという性質上、出力を調整すればスタンガンのような用途も可能かも知れない。金属である刀は、打ち合った瞬間に電気を流されて腕を痺れさせられる危険がある。鏢迫り合いは危険。

そして武器の性能もさる事ながら、彼女自身の技量こそ脅威。

目が見えていない事から、モモの視線や銃口の角度から射線を推測したり発射のタイミングを見計らう事など出来ない筈だ。

にも関わらず、飛来する睡眠弾を全て見切つて弓で切断し、叩き落とした。

晴眼者であろうと、中途半端な訓練ではそんな芸当は絶対不可能。たとえ彼女が盲目である事を考慮に入れても、手加減出来る相手ではない。

『純粹な技量の勝負では、勝てないわね』

そう、彼我の戦力差を分析する。

刀とヒートカタターの違いはあるが、殺傷能力の高い近接戦闘用の武器の使い手同士である。鳳凰の技量は自分よりも上であろうと雪は分析した。

しかし、ツキカゲにはその差を覆し得るものがある。

「キメる」

取り出したソラサキシナモンの樹皮を口にくわえる雪。

これがツキカゲ独自の技術であるスパイスだった。

特殊な品種改良によって作られたこのスパイスは人間の脳に働きかけてリミッターを外し、常人を超えた能力を引き出す。

視界がクリアになって、今迄は目には入っていても背景としてしか認識していなかつ

たものまでが克明に捉えられるようになって、流れ込む膨大な情報を頭脳は適切に処理していく。

体は羽根のように軽くなり、この時だけは世界がスローモーションになってその中を自分だけが通常の時の流れと同じ感覚で動いているような錯覚すら感じる。

繰り返す斬撃。

ただし、急所は外している。

まだ鳳凰の立ち位置が明確ではないからだ。モウリヨウに雇われているなら明確に敵対関係だが、もしそうだとすると先程までの意識喪失が彼女の仕業であるとして、無防備状態であった自分達を攻撃しなかったのは不自然だ。

故に致命打にならない程度にダメージを与えて無力化した後に拘束し、事情を聞き出そうという考えだった。

だが。

「ふっ!!」

袈裟懸け、右切り上げ、唐竹。

三種の軌道から打ち込んだ連続攻撃。しかし鳳凰はその全てに完璧に反応して、金属製のスティック部分で全て捌き切った。

「!!」

「スパイスを決めた師匠の攻撃を……!!」

雪とモモ、二人とも程度の違いはあれど、それぞれ驚愕に目を見張った。

「……………」

だが、比較的距離を置いて見ているモモと、至近距離で対峙している雪には差があった。

この時の雪は、具体的に言語化は出来ないが一つの違和感を覚えていた。しかしそれを考察するよりも、眼前の鳳凰への対処の方が現在は優先される。

スパイスを決めても、鳳凰には決定打を与えられない。

しかしそれは、一対一で試合形式で戦った場合の話だ。

何でもアリのスパイの世界ではフェアプレーに固執する必要は無い。寧ろそれは悪徳とさえ言える。打てる手があるのに、それを使っていない。ベストを尽くしていないと言えるからだ。

「師匠!!」

「百地、脇から援護しなさい。直接打ち合うのは、私がやる」

「は、はい!! 師匠」

構えと視線で鳳凰を牽制したまま、雪は弟子に指示を出す。

一対一で勝てないなら、数の利を活かす。この状況では当然の判断だった。モモは銃



を鳳凰の胸に照準したまま、回り込むように動いて牽制の動きを取る。

「……」

この時点で、鳳凰は事態が自分には不利に働いている事を悟った。

スパイスをキメた雪の攻撃を防ぎ切る事は確かに出来たが、反撃に転じるまでは出来なかった。確かに一対一ならこの状況では自分は眼前のツキカゲには勝てるだろう。だが実力には差があるとは言えそれは微差。彼女の弟子が援護に加わると五分か、分が悪くなる。

そして状況は、鳳凰にとっては更に悪い方向へと転がる。

「半蔵、百地!! 大丈夫!?!」

大広間から、モモには僅かに遅れて初芽、命、楓、五恵の4人が飛び出してきたのだ。これで1対2から1対6になった。

「……」

カチツ。

鳳凰が、弓のトリガーを引く。赤熱化していた弓毛から赤色が引いていく。

この動きを、モモは観念して投降するつもりだと捉えたらしい。銃を下ろしはしないものの、僅かにだが張り詰めていた気が緩む。

「百地、気を……」

抜くなど、そう言い掛けた時だった。

鳳凰が、予想外の行動に出た。

左手に持ったヴァイオリンを顎で支えると、弦に弓毛を触れさせたのである。

演奏の構えだ。

「……………」

何故、この状況でいきなりヴァイオリンを弾こうとするのか？

意図が読み取れず、ツキカゲ達は戸惑った表情になる。

だが、次には更に予想外の事が起こった。

「音が……鳴らない？」

鳳凰のヴァイオリンからは、何の音も出なかったのだ。素人ならば、上手く音を奏でられない事など当たり前だが……しかし、弓を動かす腕の動きや全身の立ち姿は素人目にも、特に富裕層でそうした方面に造詣の深い初芽の目から見ても熟練のマエストロのような堂に入っているものだった。それが音を出せないなど、どう考えても妙だ。

「みんな、気を付けてください。何か……」

初芽が警告しようとした、その時だった。

いきなり、6人全員、目の前が真っ暗になった。

「!? 暗い？」

「な、何が……」

最初は電気が消えたのかと思ったが、すぐに冷静さを取り戻す。

外の廊下は、まだ電気が落ちている。

思い出す。自分達が視界を確保して行動出来ていたのは、何故だったか。

「みんな、眼鏡を外して!!」

雪の指示を待たず、全員が掛けていた眼鏡をもぎ取る勢いで外していた。

初芽が開発した、暗視機能を持たせた一品だった。しかし、故障するにしても6つ同時など、そんな事偶然では起こり得ない。

ならば……!!

「……!!」

確信する。この故障は、鳳凰によって引き起こされたものなのだ。

「ちっ!! みんな、固まって」

「分かった!!」

「は、はい!!」

自分が鳳凰の立場なら、暗闇に紛れて攻撃を仕掛ける。離れていては各個撃破される危険が高い。

雪の指示に従ってひとかたまりになるツキカゲ達だったが……

「……いない?」

ようやく、暗闇に僅かながら目が慣れてきた時には、鳳凰の姿はどこにも無かった。暗視眼鏡が故障して、いやさせられてツキカゲ側が視力を失っていて攻撃力・防御力が大きく低下したその時間を、彼女は攻撃の為ではなく確実に逃走する為に使ったのだ。

「……逃げられた……?」

「いや」

刀を鞘に納める雪は、厳しい表情を保っていた。

「寧ろ、見逃してくれたと言うべきかも」

「あれが、桃源最強の実力か……確かに……とんでもないねえ」

命が、そう言った。

しかし軽いのは口調だけで、今の彼女は滝のような汗を流していた。

以前にも桃源の傭兵と戦った事はあったが、しかし肌で感じた鳳凰の実力は全く違うものだった。ここで言う「違う」とは、天と地ほどに実力差が隔絶しているという意味ではない。メートルとヘクタールがまるで違うものを表す単位であるように、そもそも強さの性質それ自体が単純な戦闘力とは完全に別物であるという事だった。

発動のタイミングを全く悟らせずに、ツキカゲ全員の意識を奪った得体の知れない

技。そして暗視眼鏡をクラッシュさせた技。

今回の接触で垣間見る事が出来たのは二つだけだが、その二つの技からして、そんなのを使う敵とは未だかつて戦った事が無い。雪も初芽も、それは同じだった。

前に白虎が言っていた、自分達とでは立っている土俵が違うという言葉。それに五恵が百人居ても勝てないという言葉も。その意味が実感出来た。確かにあんな技を使えるなら、白兵戦の実力も人数も関係無いだろう。

「それに……」

「どうしたの、半蔵？」

「さっき彼女と打ち合った時に、何か……いつもとは違う違和感を感じたの。彼女には、今回私達に見せたもの以外にも何か……隠された能力があるわ」

「な……!!」

五恵が、ごくりと唾を呑んだ。

身を以て味わった二つの技だけでも、どういうトリックなのか原理は不明ながら恐ろしい絶技であると言うのに、まだ隠し球があるとは。

底知れぬ実力に、背筋が寒くなる思いだ。しかしそんな弟子を安心させるように、初芽の手が肩に置かれた。

「大丈夫、分かったのは悪い事ばかりではないですよ」

「え、それはどういふ……」

そこからは、雪が言葉を引き継いだ。

「彼女は、私達と積極的に戦おうとはしていないかった。つまり、私達を倒しに来た訳ではない」

最初に意識を飛ばされた時と、そして今、視界を奪われた時。最低でも二度、自分達を仕留めるチャンスが鳳凰にはあった。つまり、もし彼女にその気があったのなら、自分達は二回も殺されていた事になる。

忸怩たる思いがこみ上げてくるが……しかし、それほどのチャンスがあったのに攻撃してこなかったという事は、鳳凰は少なくとも今の時点ではツキカゲと戦うつもりが無いという事だ。さっきのはこのアジトに、何らかの目的があつて潜入してきていた自分達と偶然かち合つてしまった結果の遭遇戦だった。

つまり、鳳凰はモウリヨウに雇われた訳ではない。彼女が空崎に来ているのはプライベートか、もしくはモウリヨウ以外のクライアントからの依頼のどちらかという事だ。

「ならば、戦わずとも対話・交渉する事で事態を解決する事が、出来るかも知れない」

## 第07話 テレジアと鳳凰

「釣れませんか、師匠」

「まあまあ、すぐには掛かりませんよ。考え事でもしながら、のんびり待ちましょう」

空崎市某所。

この日、鳳凰とテレジアは堤防沿いの川に釣り糸を垂らしていた。

鳳凰がこの町にやって来た目的は、桃源上層部の追放処分を撤回させて白虎を連れ戻す為である。ただし以前に雪が推測した通り特権を有する彼女をして、全くの無条件でワガママを叶えてもらうという訳には行かない。白虎を四聖獣の称号剥奪ぐらいの処分で済ませて再び桃源の一員とするには、それなりの対価が必要となる。

この場合、最も分かり易いのは白虎が果たせなかつたツキカゲ打倒の任務を、代わりに鳳凰が果たすというものだ。彼女自身もそのつもりだった。

しかしその前に、まずは白虎の所在を確かめるのが先決。

クライアントであるモウリヨウからの報告では、白虎はツキカゲに敗北し、その後は行方不明とあつた。

最初は戦闘の結果ツキカゲに消されたのかと思ったが、それには少し違和感があった。

以前に同じく桃源の傭兵にして四聖獣の一角である青竜がツキカゲと交戦し、敗北した事があった。その際には青竜自身も、彼女直轄の部下である竜軍団も無力化された後で警察に引き渡された。

勿論、それなりの尋問は行われたのであろうがツキカゲ達は倒した相手の命までは奪おうとはしなかった。

今回の白虎は、敗北した後の足取りが一切不明。死体も見付かっていないし、警察やどこかの組織に引き渡されたという情報も無い。

ならばツキカゲに拘束されている？ だが何の為に？

尋問で情報を引き出そうにも、余り長く手元に置いてるのはかえってツキカゲ側にも都合が悪い筈だ。

じゃあ何故、白虎は解放されない？ それとも、モウリヨウが何かをした？

全て推測でしかないが、傭兵のカンで何か腑に落ちないものを感じた鳳凰は手始めにモウリヨウの末端組織を襲撃して、改竄されていない情報を手に入れようとした。これまでの襲撃はその為のものである。証拠は何一つ残していないし、元々モウリヨウは非合法の闇組織。潰された所で文句は言えない。



しかし所詮は末端か、手に入った情報で見るべきものは多くなかった。精々が、エモ・パチーノのアジトから手に入れたデータで白虎と同時期にもう一人、名の通った傭兵のドルテという女が雇われた事ぐらいだが……

こうして調査が煮詰まってきたので、一度気分転換にと鳳凰はテレジアを連れて釣りに出たのだ。

「……」

テレジアは、隣に座る師の横顔を、じっと見詰めた。

二人の出会いには、もう十年も前に遡る。

当時のテレジアは、人身売買組織に囚われていた。

来る日も来る日も死なない程度に痛めつけられ、苦痛だけしかないような、いつ終わるかも知れない日々。

だがそんな時間は、唐突に終わりを告げる。

何の前触れも無く現れた鳳凰が、たった一人で組織を潰して、彼女を助けてくれたのだ。

鳳凰はテレジアを、別の町の設備が整った病院に入院させてくれた。

適切な治療を受けて二週間も経つと、テレジアは怪我もすっかり治って元気になった。

それを確かめた鳳凰は、テレジアに親元に帰るように言った。

テレジアはその時、首を横に振った。

彼女にとって親とは、自分を金儲けの為の道具か、さもなければ憂さ晴らしの為のサンドバッグとしてしか見ていない男を指す言葉であったからだ。

「……では、信頼出来る学校にあなたを預けます。そこでなら友達も出来るでしょう。これからは盗みなどせず、真つ当に……」

「いやだ」

「……」

「親なんか要らない。友達なんか要らない」

親とは、憎しみの対象でしかない。友達だと思っていた女は、私を見捨てて自分だけ助かった。

「私を助けてくれたのはあなた。私には、それだけが本当の事だから。だから」

「……」

鳳凰はその時、何も言わなかったがその先に続くテレジアの言葉が容易に分かった。

だから、私を捨てないで。

「……では、テレジア。一つだけ、心して答えなさい」

さつきよりもずっと真剣な声色になって、鳳凰は問うた。テレジアも察して、真剣に

答える姿勢を見せた。

「理解しているかどうかは分かりませんが、私が生きているのは生きるか死ぬかの世界です。明日にもあなたは死ぬかも知れないし、それは私も同じ。私のこの目も、戦場で失いました。私に付いてくるという事は、そういう事。それでもあなたは私と来るのですか？」

テレジアはその問いに、是と答えた。

「他には、何も要らない。他のものは全て無くして、捨ててしまったから。だから私は、あなたに付いて行きます」

「……分かりました。ならばテレジア、せめてあなたがこんな世界でも、強く生きていく事が出来るように。私の全てを、あなたに授けます。これよりは、私があなたの師となる。師匠と呼ぶように」

「はい、師匠」

こうしてテレジアは鳳凰に連れられて桃源に入り、そこで修行が始まった。

「まずはテレジア、最初の修行に入ります」

「はい、師匠」

道場で正座して、真新しい稽古着に身を包んだテレジアは緊張して応じた。

「と、言っても今日は何もしなくて良いです。修行は明日の夜明けから行うので、あなた

は私より先に来て準備を整えておくように」

鳳凰はそう言ってこの日は道場から出て行ってしまった。

次の日、テレジアは夜明けと共に道場に入る。するとそこには、鳳凰が正座して待っていた。

「あ、あの……師匠……」

途端にしどろもどろになって弁解しようとするテレジア。鳳凰は怒るでもなく、

「テレジア、私はあなたに、私より早く来るように言いました。しかしあなたは遅れてきました。明日、出直してきなさい」

そう静かに言い捨てて、その日は道場を出て行った。

次の日、テレジアは朝の5時に道場入りした。果たして、鳳凰は昨日と同じように正座して待っていた。

「……テレジア、私は今まで、あなたのような不精者には会った事がありません。明日、出直してくるように。これが最後ですよ」

昨日と同じように怒りも何も感じさせない穏やかさでそう言うと、鳳凰は道場から退出した。

この言葉を受けて、テレジアは背筋がぞつと寒くなった。

出来なければ、捨てられる。他には何も無い自分が、その最後の縋るものさえ無く

なってしまう。それは、何より恐ろしい。

次の日、テレジアはまだ日が変わる前から道場に入った。流石にこの日はまだ、鳳凰の姿は無かった。ほっと、胸を撫で下ろす。

そして待つ事3時間。

すうつと道場の戸が開いて、鳳凰が入ってきた。

顔には、微笑が浮かんでいる。

「うん、私より先に来ましたね」

「はい、師匠」

鳳凰は頷いたテレジアの頭を、わしゃわしゃと撫でた。

「し、師匠?」

「よくできました。物事というのはこれぐらい周到に取りかからなくてはなりません。殊に、私達の生きるこの世界ではね。周到に準備する事で、少しでも生き延びる可能性を高くする事が出来ます。これが私からの最初のレッスンですよテレジア。覚えておくように。3回目でこれに気付ける辺り、あなたは素晴らしい弟子です。誇りに思いますよ」

「……はい、師匠」

誰かに褒められた事など、もうずっと記憶に無かった。この時のぬくもり、暖かさを、

テレジアは今も忘れない。

次の日、テレジアの前には数学や英語など、様々な本が並べられた。

「し、師匠……これは？」

「見て分かりませんかテレジア。本です。教科書」

「い、いえ教科書は分かるんですが……何故こんなものが？」

「何故も何も、勉強するのですよ」

流石に誰が、とは聞かなかつたが、

「どうして？」

とは、尋ねた。

「……まさかテレジア、あなた桃源が傭兵組織だからと言って、格闘技や射撃の訓練ばかりさせられると思っていたのではないでしょうね？」

「……」

テレジアは答えなかつたが、鳳凰は心音を聞き取ってイエスノ程度程度の読心術は出来る。すぐに「凶星ですか」と呆れたように溜息を吐いた。

「上の者は未だに傭兵は腕っ節さえ立てば良いと考えていますが……そんなのではこの先通用しなくなります。これからの傭兵は強い事は優秀か否か以前の前提条件で、そこから何が出来るかこそが問われるようになりますよ。物資の調達とか兵站ラインの構

築、新兵の訓練などですね。バカではとても務まりません」

「はあ……」

「加えて、例えば仕事で外国に行ったとして、現地の通訳は敵のスパイの可能性がありませんからね。ある程度の外国語は覚えなければなりません。ちなみに私は14カ国語が話せます」

「……」

「それともう一つには、傭兵は潰しが利きません。テレジア、あなたが傭兵として生きようとしても、戦傷や病気で、それが出来なくなるケースも十分有り得ます」

鳳凰はそう言つて、閉ざされた自分の目をつついた。

「この目だって、普通なら失明した時点ですぐ現役引退、その後はリハビリや盲目で生活する為の訓練などをしなければなりません。この私だからそういったもの一切無しで、すぐに現役続行出来ているのです」

「でも師匠、私は」

「……テレジア、私は自分にはどんな分野で世界中の誰と競争しても勝てるだけの才能があるかと自負していますが、その私ですら、一生ものの傷を負う事は往々にしてあるのです。ましてあなたを含む私以外の人間には、そうした事態が十分以上の確率で有り得るのです。そうなった時に、戦う事だけしか知らない人間が世の中に放り出されて、ど

うやつて生きていくのですか？ 言っておきませんが、桃源は任務を遂行出来ない者、任務に就けなくなった者は容赦なく見捨てますよ？」

弟子の抗議を遮って、脅すような響きの言葉が師の口から語られる。

「……それにこの先、実戦を経験して怖くなって、もう傭兵を辞めたいと思う事だつて有り得ると、私は考えています。それを否定する気はありません。そうなつて、桃源を出た者を私は何人も見送つてきましたから。テレジア、そうなつても生きていける知識や学も、私はあなたに授けたいと思つているのですよ」

「……はい、師匠」

最初は自分の決意を軽く見られているのかと思つたが、不思議と怒りや侮辱された気持ちには湧いてこなかった。

この人は本当に自分の事を想つてそうしてくれているのだと、テレジアには分かつた。

師として、鳳凰はテレジアをあらゆる所に連れて行つた。

二人は、その中でずっと生死を共にした。

多くの危険を味わつて、神と世界に何度も絶望して。

人がどれだけ醜く、残酷になれるのかを思い知つた。

人の良心が、どれだけ弱くどれだけ脆いかを思い知らされた。



だがその中で自分が歪む事なく在れたのは、鳳凰が傍に居てくれたからだろうとテレジアは思う。自分の半分以上が、鳳凰のものであるとも。

魂は鳳凰によつて鑄造された。

業は鳳凰から伝えられた。

体は鳳凰によつて鍛えられた。

時々思う事がある。もし、この人に会わなかったら、自分はどうなっていただろうと。どこかの売春宿に売り飛ばされるか、それとも鉄砲玉に仕立て上げられるか。

漠然としたイメージは浮かぶが、だが決まつて答えは出ない。この人が居ない事など、もう想像出来ないから。

「……師匠……」

テレジアが何か言い掛けた、その時だった。

「む」

鳳凰が持っていた竿が、びくりと動いた。

「来た。来ましたよテレジア」

リールを巻いて竿を持ち上げる。ロッドが、いきなり折れそうな程にしまった。勢いによつて、鳳凰の体が川に引き込まれそうになる。

「お、大きいですよ師匠!! 慎重に!!」

興奮したテレジアが、鳳凰の体をがっしりと掴んで固定した。

「師匠、ファイト!!」

「一発!!」

思い切り、釣り竿を引き抜く。

ざばあっ!!

水柱が立って……

「……………」

霧雨のような水飛沫を浴びつつ、鳳凰とテレジアは絶句する。

釣り針が引っ掛けていたのは、魚ではなく人間だった。

「なっ……………」

「何ですか? これは…………?」

赤いドレスを着た、全身筋肉の塊のような女が川の中から吊り上がったのだ。

## 第08話 ツキカゲからの申し出

傭兵ドルテが何者かの手によって捕縛され、空崎市警察署に放り込まれた。

空崎財団からもたらされたこの情報を受けて、すぐにツキカゲには召集が掛かった。

メンバー全員が集まった事を確認すると、カトリーナは手元の機器を操作してデイスプレイを起動させる。

短い唸り声のような音が鳴って、空間にバストアップの映像が浮かび上がった。

それを見たモモは「うわあ」という顔になる。

先日、エモ・パチーノのアジトに踏み込む前段階の仕込みとして、彼の部下であるマルコ・ネエロに盗聴器と発信器を取り付けるミッションがあった。それには雪とモモの師弟コンビで当たった。

結論から言うとそのミッション自体は滞りなく成功した。

が、後は脱出するのみという所で、用心棒として控えていたドルテと遭遇して戦闘に突入。

モモ一人では追い詰められがちだったが、雪のフォローもあってドルテを電車から突

き落として川に沈める事に成功した。

その後の行方は知れなかったが……まさかいきなり警察に放り込まれるとは予想外だった。

「……それで、彼女を警察に運び込んだ人物は分かっているの？」

「いえ、それが朝になって警察署の正面玄関に、ぐるぐる巻きにされて放置されていたらしくて……監視カメラにも、それらしい人物の姿は映っていません」

雪の質問には、初芽が回答した。

計器の操作で監視カメラから撮影された映像が空間に出現したが、ドルテを担いでいたりあるいは不自然に大きなケースを持っていたりしている人物の姿は映っていない。車を使っている可能性も考慮に入れて探してみたが、車に彼女を運び込むようなシーンは、やはりどのカメラにも映ってはいなかった。

「やっぱりこれは、あの鳳凰って人の仕事でしようか？」

「恐らくは、ね」

弟子の問いに、雪は即答した。

「後で分かった事だけど、私達がマルコに発信器を仕掛けた時点で、エモ・パチーノはモウリヨウの傘下に入っていた。アジトにあった情報からモウリヨウは白虎と同時期にドルテを雇っていたようだし、ドルテはモウリヨウから提供された戦力だと考えられる

わ

ならばツキカゲ以外に今この空崎にいる人間で、モウリヨウの用心棒を倒せるのは？  
また、モウリヨウ相手に喧嘩を売るに等しいそんな暴挙と言つて差し支えない行いに踏み切れる者は？

そうした条件で線を引くと、残るのは一人だけだ。

桃源最強の傭兵、鳳凰。

「彼女が宿泊しているホテル周囲に飛ばしたドローンは、全機が故障を起こして映像・音声拾えない状態になっています。回収して分解点検してみましたが、電子機器に何らかの負荷が掛かって機能不全に陥った以上の事は分かりませんでした。しかも、銃撃や投石などの手段で、外部から物理的に衝撃が加えられた形跡は見当たりませんでした」  
「あの時の軍事人形と同じかあ」

思い出されるのは、沿岸部工場地帯で密輸会社が所有する百体もの軍事人形が一齐に機能停止していた光景である。あの時も、軍事人形は打撃や銃撃などでダメージを与えられた形跡など何処にも無く、バカでかい金属の彫像と化していた。

前後の状況から推測すると、あれは鳳凰の仕業に違いない。

同じ技で、彼女が宿泊している空崎グランドホテルに近づく監視用ドローンは、全て撃墜されているのだろう。

「そして、先の遭遇戦で暗視眼鏡を一斉に機能不全にさせた技……」

「あの故障、鳳凰つて人が、音の出ないバイオリンを構えた途端に起こりましたよね」

「つまり、あのバイオリンが何らかの秘密兵器つて事でしょうか……？」

「更に、私達全員の意識をいきなり5分も飛ばした技もある……密輸会社の社員が無力化されたのも、同じ技を使ったからだと思われるわ」

神業という言葉すら霞む超絶の技術なのか、それとも最新テクノロジーの結晶なのか。いずれにせよ恐るべき能力だと言えるだろう。

電子機器を無力化されるという事は単純にデジタル制御の装備が使えなくなるばかりではなく、近代において正規戦・不正規戦を問わず大きなウエイトを占める通信・連絡手段を無力化され連携が取れなくなるばかりか応援を呼ぶ事も出来なくなる。そして意識を飛ばされて無防備状態では、どれだけ白兵戦の実力があろうと関係無い。あっさりとな付かれて煮るなり焼くなり、好きに料理されてしまうだろう。

「白虎ちゃん私達とは立っている土俵が違うと言ったのも分かりますね」

「私達ツキカゲの技が戦術レベルのものだとすれば、鳳凰の技は戦術レベルのもの。個人でそんなものを使うのは、脅威という他は無いわね」

「えっと、師匠……戦術と戦略つていうと……」

「……簡単に言えば、目の前の敵を倒すのが戦術。もつと視野を広げて、広いエリアを制

圧するとか戦争に勝つのが戦略という事よ。だから、戦場で戦術的には勝つていても戦争で戦略的には負けているという事態は、いくらでも有り得るの。例えば相手にわざと見付かるようにオトリを出しておいて、そっちに注目を集めている間に、本命を目的地に届けるのか……」

それはこの空崎を舞台としたツキカゲとモウリヨウの攻防にあつて、両者共に手を変え品を変えて繰り広げられてきた情報戦の、ほんの一端でもある。

「だから相手の狙いを正確に見抜けるように、視野を広く持つ事を心掛けなさい。ツキカゲの任務は目の前の敵を倒す事ではなく、あくまでもこの町を守る事なのだから」

「はい、師匠」

雪の薫陶を受け、モモは深く頷くと幾度か、ぶつぶつとその言葉を繰り返した。

「で、これから命達はどうか動くべきかな？」

と、命。

これまでの話はあくまでも状況確認。今回の召集は、今後どのようにツキカゲが動くかについての会議の為だった。

「まず状況の整理……現在、この空崎はいわゆる三すくみ状態にあると言えるわ」

ツキカゲ、モウリヨウ、そして鳳凰及び彼女のバックにいる桃源。

今の状況ではどの勢力も鳳凰がモウリヨウに仕掛けたような小競り合い程度ならば

いざ知らず、迂闊に残り2つのどちらかへと本格的な攻勢に出る事は出来ない。下手に激突しては勝てたとしても、ダメージを負った所に無傷のもう一つの勢力に襲われてやられる。まして二正面作戦など論外である。

とは言え、このままの膠着状態をずっと続けている訳にも行かない。これまでの調査で得られた情報から、モウリヨウが何かしらの大規模な作戦を計画している事は明白。時はモウリヨウに味方している。何かしらの破極点を見付けて状況を変えない限り、ツキカゲは負ける。

その破極点と成り得る者は、決まっている。鳳凰だ。

「彼女を上手く味方に引き入れるか、少なくともこちらに敵対しない事を約束させられれば、モウリヨウ側は実際には鳳凰に戦う意志は無くても、彼女にも警戒しなくてもならないから私達は圧倒的に有利になる」

雪の考えは、少なくともその目はあると言える。

これまで断片的に得られた情報だけが、鳳凰に積極的にツキカゲを攻撃する意志が無い可能性は高い。ならば交渉する事は出来る。

すると考えるべきは誰が交渉に当たるか、そして交渉の為の条件をどうするかだが

……

誰からともなく、この部屋にいる全員の視線が、たった一人に集まった。



「あ、ファンさん」

「うん、ああ命さんですか。お久し振りですね」

市内で、命が歩く鳳凰を呼び止めた。シスター服で町中を歩く彼女は人混みの中でも目立つから、見付けるのに苦労は無かった。結局あの後、本人も含む満場一致で鳳凰との接触役は既に一度彼女と話している命に決まったのだ。

「お久し振りですね。どうですか、これからまたデユオでも……」

持っていたバイオリンのケースを持ち上げる鳳凰。命もそれを見てギターケースを担ぎ直す。

「ええ、それも良いですけど」

ここで、命の声色がほんの少しだけ低くなった。

「鳳凰さんと、話を付けてからという事になりますかね」

「！」

ぴくりと、鳳凰の片眉が動いた。

鳳凰の名前は、一般には知られていない桃源より与えられたコードネーム。勿論、一

度会っただけの命には教えていない。なのにその名前で自分を呼ぶという事は……  
「成る程」

ふっと小さく息を吐いて、鳳凰は命に顔を向けた。

「あの Wasabi という店で、私と話をしていたあなた達の心音の反応は、一般人の心理状態とはどう考えても違っていましたが……やはりツキカゲかモウリヨウのいずれかでしたか」

「命はツキカゲだよ」

「ほう……」

鳳凰にしてみれば、白虎を連れ帰るのが目的でありその白虎を拘束している可能性が高いツキカゲとの接触は願ってもない事である。

何とか接触を図りたいと思っていたが、向こうからその機会が来てくれた。

「ついでに言うと、あのエモ・パチーノのアジトで接触したのも命達ツキカゲだねえ」  
「ふむ……私は目が開いている人より物が見えていると自負はしていますが……やはりこういう時は不便ですね」

やれやれと首を振る鳳凰。

アジトでの接触時、もし鳳凰の目が見えていれば命の顔を見れた事と、状況や服装からツキカゲである事に気付いたろうが盲目の彼女は、咄嗟の接触である事も手伝って正

確に状況が把握出来なかつたのだ。

「さて、命さん。それで今日は私に何の御用で来られたのですか？」

まさか世間話をして茶をしばきに來た訳でもあるまい。

「単刀直入に言うよ。今、命達ツキカゲは白虎ちゃんを保護しているんだ」

「……!!」

「モウリヨウに飲まされた薬の検査とかは念入りにしたけど、拷問とかそーゆーのは一切してない、元気にやつてるよ」

ここで、白虎を傷付けていない事はツキカゲ側にとつても幸いと言える。こういう場合無傷でなくては、交渉の材料にならない。実際には雪が脅し半分であつたとは言え溶鉱炉の上で逆さ吊りにしたりしたが、余計な事は言わないでおく。怪我の功名とでも言うべきか、モウリヨウ側が仕込んだ薬か何かの作用で、白虎自身もその時の記憶が飛んでいる事だし。

「……続きを」

「それでね、命達としては白虎ちゃんを鳳凰さんに引き渡しても良いと思つてる。もし白虎ちゃんが任務に失敗したのに手ぶらで桃源に帰れないつて言うんだつたらある程度のお金も一緒に付ける用意もある。その代わり、この一件からは手を引いて欲しいんだ」

「……」

僅かな時間だけ、鳳凰は黙考する。

悪い条件ではない。元々モウリヨウからの依頼などキナ臭い事この上無いし、第一白虎と一緒に雇われたドルテがどう見ても薬漬けにされていた事から何かが違うといれば白虎もそうされていた可能性が十分ある。となればこれはモウリヨウ側の契約違反となり、鳳凰としては白虎の仕事を引き継いでツキカゲを倒すのではなく、寧ろ不実なモウリヨウにこそ制裁を加えなければならない立場である。

そこにツキカゲ側からのこの申し出は、彼女にとっては渡りに船とさえ言えた。ツキカゲ側とはさつさと決着を付けて、モウリヨウの方に意識を集中したい所である。

「……良いでしょう」

「じゃあ」

「ただし、条件は良く摺り合わせたいですね。私達が持っている情報の交換も含めて、会談の上で決めたいと思いますか？」

これは尤もな申し出であり、想定されていたパターンの一つであったので、命も了解を二つ返事で返した。

「そして会談を行うに当たって……1、場所と時間は私から指定して良い事。2、ツキカゲ側は2人までで来る事。こちら私と弟子の2人で応対します。3、会談が終わるま

では他のツキカゲは私達の500メートル以内へは近付かない事。この条件を呑んでもらえるのであれば、会談に応じて交渉のテーブルに着きましょう」

「師匠、気に入ってくれると良いけど……」

CDが入った袋を手にしたテレジアは、ホテルへの帰り道だった。

バイオリンを嗜む鳳凰は当然の如く音楽に造詣が深い。そんな彼女に師事している関係上、テレジアもまた音楽に触れる機会が多くなり、彼女は師へのささやかな慰みと音楽CDを買って帰る事があった。

そうしてホテルの正面玄関の所で、空崎高校の制服を着た二人の女生徒とすれ違った。

十歩ばかりそのまま歩いた所で……テレジアと、女生徒の一人、眼鏡を掛けた方とが殆ど同時に足を止めた。

「……………」

「師匠?」

女生徒の黒髪の方、五恵が初芽に声を掛ける。

この二人は、ドローンによる監視が出来ないのなら忍鳥モノミによる偵察と後は肉眼で確認するしかない、この空崎グランドホテルを巡回・警戒していたのだ。今はちよ  
うど命から鳳凰と接触したとの連絡が入ったので、一度基地に戻ろうとしていた所で  
あった。

「あ、あの」

声を揃えて振り返って、言葉を失った。

「初芽……」

「テレちゃん……ですか？」

## 第09話 鳳凰の教え

青葉初芽とテレジア・レイの出会いはまだ二人がずっと幼かった頃の話だ。

初芽が持っていたバッグを、既に盗みに手を染めていたテレジアはひったくった。

白昼堂々の犯行。ファーストコンタクトとしては、最悪と言つて差し支えないものであった。

この時テレジアは初芽のボディガードをしていた黒服に取り押さえられて、袋叩きの憂き目に遭うのかそれとも然るべき所に突き出されるのかと覚悟したのだが……しかし、どちらでもなかった。初芽はこう言ったのだ。

「放してあげてください。そのバッグは盗まれたんじゃないやありません、あげたんです。その子は私の友達です」

「友達だから名前を知らなきゃですね。私は青葉初芽。あなたは？」

この時はほっとするより先に見下されているように感じて、テレジアは手にしたバッグを初芽に放り投げて、逃げ出した。

手ぶらで家に帰ったテレジアは実父に体中痛みを感じていない所が無い程に痛めつ

けられた。

父親にとって、テレジアは盗みも売春（ウリ）も出来ない穀潰し、役立たずでしかなかった。その役立たずの唯一の取り柄は、サンドバッグの代わりになって自分のストレスを発散させる事だったのだ。

だがその後も、テレジアの行く先々に初芽はやって来た。

どれだけテレジアがその手を振り払っても懲りずに、諦め悪く。

結局、初芽が諦めるよりもテレジアが絆される方が早かった。

「なつてやる。お前の友達に」

その時、自分に向けてくれた初芽の笑顔を、テレジアは今も忘れない。

だが蜜月の時は、長く続かなかった。

人身売買を生業とする組織に、二人揃って誘拐されたのだ。

監禁されていた二人の内、まず初芽が何処かへと連れて行かれた。

「テレちゃん、きつとまた会えます。離れても、ずっと友達だから」

叫びながら、初芽は重くて冷たく、頑丈なドアの向こうへと消えていった。

テレジアは必死に抵抗したが、子供故の無力さ。彼女の行動は自分の体に傷を増やすだけに終わった。

固く閉ざされた扉越しに、自分に買い手が付いたと組織の人間が話していたのを、テ



レジアはぼんやりと聞いていた。

その矢先に、鳳凰がやって来て自分を助けてくれた。

自分を抱き上げる鳳凰に、レジアは懇願した。

「お願い、もう一人助けて。友達なんだ」

だがその時、鳳凰の口から出た言葉はレジアに大きな衝撃を与える。

「……残っていたのは、あなた一人でした。多分、買われたのか身代金を払って解放されたのか……」

結局、この時はレジアの衰弱が著しいのでひとまずは治療が優先という判断で彼女は病院に担ぎ込まれるのだが……

暫く後に、誘拐犯達が持っていた人質と金の流れが記されたりリストに、初芽が金を払って解放されたと記録されていた事が分かった。

それを聞かされた時のレジアは、今迄感じていた友情や信頼の、全てが反転していくのを実感していた。

結局、最初に感じた不快感は間違っていないなかった。初芽は口では友達などと言いつつ、実際には自分の事をペットぐらいにしか思っていないかったのだ。

金持ちが野良猫に餌をやって、自己満足に浸っていただけだ。

だからあいつは私を捨てた。

一人だけ金を払って助かった。

詰まる所、一時でも他人に心を許した自分が愚かであつたのだと、テレジアは思い知った。

そして、現在。

ホテル前で出会つた初芽から、一緒に居た学校の友達だという五恵を合わせた3人で初芽の家へと招かれる。

初芽はあの時の事を悔いているようだったが……

だが、もう古い友達の言葉を信じることは、テレジアには出来なかつた。呼び止める声に背を向けて逃げ出すように初芽の家を後にすると、そのまま空崎グランドホテルの最上階、自分と鳳凰が宿泊しているスイートルームへと駆け込む。

「師匠、ただいま戻りました」

「ああ、お帰りなさいテレジア」

広い部屋の真ん中に立つ鳳凰は、テレジアに背を向けたままで応じた。彼女の右手には絵筆、左手には何色かの絵の具が乗せられたパレットが持たれていて、キャンバスに向き合っている。

ただし直立してはおらず、下半身は空気椅子のような姿勢で、その状態で微動だにせず筆を走らせていた。

「……何か、嫌な事でもありましたか？」

「……っ」

唐突に切り出されて、しかし核心を突かれたテレジアは一瞬言葉に詰まった。

その後ですぐに感情をニュートラルに戻すと、表情筋に走っていた力を抜いた。

「い、いえ別に」

「嘘は上手に吐くものですよ、私と何年付き合っていると違うのですか？」

鳳凰はテレジアの言葉を一言で切って捨てた。

「心音が、何かあったと雄弁に語っています。それに今あなた、一度言葉に詰まった後で語気を強めにして返答しましたね？ それは人が嘘を吐く時の、典型的なパターンです。私に嘘は通じませんよ」

怒っている様子ではないが、少しだけ居心地の悪さを感じたテレジアはひとまず話を切り替えようとして、話題を探して視線を彷徨わせて……そして鳳凰が前にしているキャンパスに目をやった。

そこに描かれているのはまだ完全に色が入っている訳ではないが、人物画であるのが分かった。

「そ、それより師匠……この絵は……」

「……もうすぐ、個展を開きますからね。この絵も出展する予定なのですよ」

「これは……私、ですか?」

下書きに描かれている人物には、確かにテレジアの特徴があった。

それにしても、誰が信じるだろう。これを描いたのが盲目の人間だなどと。目鼻立ちや体格など、写真に撮ったように正確である。

「私は目が見えないですが、見えていないから見えるものもあるのですよ。室内なら、こうして会話しているだけでも音や声の反響でどこに何があるかは勿論、物体の『像』を読み取って顔形が分かるのですよ」

「では、肌の色は……」

絵に入っているテレジアの肌の色は、彼女のそれと全く同じだった。

「あなたの体に触れて、筋肉の付き方や皮膚の感触から人種や肌、髪の色は分かります。絵の具は匂いを嗅げば、色は分かります。例えばカーボンが多ければ黒といった感じにね。色を混ぜる時は、筆先に付着した絵の具の重さを感じ取って、適切な重さごとに混ぜ合わせる。緑を作る時は、黄色と青を同じ重さずつといった具合に……後は、記憶している位置に、筆を置いてやれば絵は完成します」

「はあ……凄いですね、師匠」

「ふふっ」

ちよっぴり謙遜気味に、鳳凰は笑った。

「あなたも知つての通り、私は少年兵の社会復帰を手助けする活動もしています。彼等に手に職付けさせる為には、それを教える私が出来ませんでは、尊敬されなくなつてしまいますからね。私は絵や音楽の他にも、よろずごとを勉強しているのです。特に針灸師としてはそれなりのもので、私でなくてはというお客が、中国は勿論アメリカにも居るのですよ」

そう言った所で、「さて」と一息吐いて空気椅子を中止すると、筆とパレットを置いた。「テレジア、あなた話をはぐらかしましたね。何か話しづらい話題なのですか？」

「えっと、それは……」

「成る程、そうなのですね」

心音を聞き取つて、鳳凰は返事を聞くよりも早く答えを導き出した。テレジアは脱帽という顔になる。この師匠に隠し事は出来ない。

「実は……」

観念して、全てを話す事にした。

昔、離れ離れになった友達、初芽と再会したこと。

しかし話をして、拒絶してしまったこと。

鳳凰はテレジアが話し終わるまで沈黙を保っていたが……

語り終わつて、やや沈黙が下りた所で口を開いた。

「テレビア、あなたはそれで良かったのですか？」

「それで、つて……」

「友達と、仲違いしたままで良いのかと聞いているのです」

鳳凰の言葉は変わらぬ穏やかであるが、どこかテレビアは自分が責められているように錯覚した。

気付いていてそれを吹っ切ろうとしてか、あるいは気付かないままか。

いずれにせよ、彼女は次の言葉の語気を強くした。

「私には、友達なんて要らない。親なんて要らない」

友達だと思っていたヤツは、自分を裏切り見捨てた。

親にとって自分は苛立ちの捌け口でしかなく、自分にとって親とは憎しみの対象ではない。

「私にとって親と呼べる相手が居るとしたら……それは師匠、あなたです。あなたさえ、あなただけ居れば、私はそれで良い」

友達も親も、信じられない。

信じられるのは唯一人。自分を救って、育ててくれた人。それが鳳凰だった。

「……テレビア」

鳳凰は少しだけ、逡巡するように間を置いた。その後で、同じように穏やかな表情と

言葉で話を続ける。

「こんな私を、親と思ってくれる事はとても嬉しく思います」

「じゃあ……」

「ですがテレジア、私を親と思うなら、親は子であるあなたよりも、先に死ぬものです」

「そんな、師匠……師匠が死ぬなんて」

「それが摂理であり、道理なのですよ。そうあるべきなのです。勿論、この世界では私は明日死んでも不思議ではありませんが」

穏やかに、論すように。だが強い口調で鳳凰はテレジアの言葉を切って捨てた。

「だからテレジア、親が居なくなつた後に頼れるのは友達です。友達は、大切にしなさい」

「……師匠」

「第一テレジア、あなたは本当は、その初芽さんと仲直りしたいと思つていのではないですか？」

「そ、そんな事はありません、師匠……」

弟子の答えを聞いた鳳凰は、呆れた顔になった。

「……何度でも言いますがテレジア、私に嘘は通用しません」

「う……」

ぐうの音も出なくなったテレジアの様子を察すると鳳凰は彼女の前に近付いてきて、ぐつとその手を掴むと、空いた手でポケットから取り出した何かを握らせた。

掌に固い感触を覚えて、渡された物を見るテレジア。

「これは……」

渡されたのは、ピンク色をした小さな猫の人形だった。

昔、テレジアが友情の証として初芽に贈った物だ。本当は青色の物との2つセットであつたのだが、誘拐犯によって離れ離れにされた時に、初芽が落としてしまった片方だった。これは鳳凰によって回収されていたのだ。

桃源に引き取られ、正式に鳳凰の弟子となつた時にこれはテレジアに渡されていたのだが……

「私ほんなの、もう何とも……」

「本当に何とも思っていないのなら、捨てるなり壊すなりすれば良かったでしょう？ 捨てる事も出来ず……いえ、それをせずに目に触れない所に保管しておくのが、あなたが友情を捨てられない事の、何よりの証拠ですよ」

「……師匠……はい」

友情の証を、テレジアはぐつと握った。

「……私、もう一度、初芽と話してみます」



## 第10話 会談前日

「初芽!!」

「!! ……テレちゃん」

一夜明け、初芽の自宅であるマンションの入り口。

登校しようとしていた初芽は、そこで待っていたテレジアに呼び止められた。

「あの……」

二人ともお見合いするように同じタイミングで言葉を切り出して、そして詰まってしまう。

どうぞ、という初芽の仕草を受けてテレジアの方から話を再開した。

「昨日の私はどうかしていたよ。お前に酷い事を言ってしまった……すまなかった……」

ぺこりと、頭を下げる。

「テレちゃん……私こそ、無神経でした。ごめんなさい」

初芽も同じように頭を下げた。

「……初芽、もっと沢山話そう。今迄ずっと会えなかった分も、積もる話を、一緒に」  
「そうですね、テレちゃん。じゃあ、今日は大切な用事があるので明日にでも。美味しいパンケーキを出すお店を知ってるんです。楽しみにしていて下さいね」  
「パンケーキ……」

思わずごくりと喉を鳴らしたテレジアは、はつと気付いて緩んでいた表情を引き締め直した。

「分かった、初芽。待ってるから」

ツキカゲの秘密基地。

その訓練施設の一角にある射撃練習場では、雪の監督の下モモが緊張した足取りで、空崎の町並みを再現したブースを移動していた。

両手でしっかりと把持したスマホガンを構えたモモは、瞬きもせず上下左右に気を配りつつ、じりじりと進んでいく。雪はその後ろをゆっくり歩いて付いていく。

と、不意に二人の前の空間に立体的な人影が浮かび上がった。射撃目標となるホログラムだ。数は一つ。

「!!」

モモは素早く反応して、目線とスマホガンの銃口を平行にしたが動きはそこまでだった。指が引き金を絞る事は無い。

一秒ばかりの時間が過ぎて、標的ホログラフが消失する。雪は「うん」と満足そうな頷きを一つ。

今、モモの前に現れたホログラムはただの一般市民であった。

仮にモモがスマホガンを撃っていたら、これが実戦ならば町とそこに生きる人々を守る筈のツキカゲが、あろう事かその守るべき市民を殺傷してしまったという事になる。もしそれをやってしまったらどうしようかと思っていたが、杞憂に終わった事に内心安堵する。

「師匠」

「ほら、小さな成功にいちいち喜ばない。次が来るわよ」

芸を成功させて調教師にご褒美をねだる水族館のイルカのようにモモが振り返るが、雪は落ち着いて返す。

気を取り直して、訓練を再開するモモ。

しばらく進んでいくと、今度は二つのホログラフが同時に眼前に出現した。

「!!」

今度は一般市民ではない。

どちらのホログラムも武器を持っている。

敵。

瞬時にモモは判断して、発砲。

胸に二発ずつ命中させて、ホログラムが消失する。

「今のは55点ね」

「えっ……」

ちよつと辛口な雪の採点を受け、モモは心外そうな表情を見せた。今のは上手く出来たと思つたのに。

「もう一度、今の標的を出して」

雪がそう言うのと、たった今消えたばかりのホログラムが再び二人の眼前に出現した。

「射撃は上手くなつた。でも、順番が違うわよ」

「順番、ですか？」

「そうよ、良く見て」

言われて、モモはホログラムへと視線を送る。

「数秒して、彼女は「あ……」と気付きの声を出した。雪が「そうそう」ともう一度頷く。

「この二人はそれぞれマシンガンと拳銃を持っているけど、モモ、あなたは拳銃を持っている方から先に撃った。順番が違うというのはこの事よ。まずは強力な武器を持った方から先に倒すこと。それに拳銃を持った方は、まだこちらに銃口を向けてはいなかった。後回しで良いのよ」

「はい、師匠」

「うん、ではもう一度」

再び、訓練が再開される。

十数秒の時間を置いて、再び電影が出現する。

「!!」

モモは素早く銃を構えるが、発射はせずに標的が消えるのを待った。

「モモ、どうして撃たなかったの?」

「え……でも、師匠。武器は持っていませんでした」

「果たして本当にそうかしら? 今の標的をもう一度出して」

先程と同じように、ホログラフが再度出現する。

まじまじと、視線を送って観察するモモ。

確かに武器は持っていないようだが……

「良く見なさい。右のポケットよ」

「え……」

言われた通りモモが視線を送ると……ホログラムの男の右ポケットの部分に、ただ手をつ込んでいるだけとは違う、異様な形の膨らみがあるのが分かった。

拳銃だ!!

ポケットの中の拳銃が、こちらに銃口を向けている!!

「っ!!」

モモが反射的にスマホガンの銃口を上げるが、照準がホログラフの胸に合うよりも、すぐ後ろに立っていた雪が早撃ちで標的の胸を貫く方が早かった。

「し、師匠……」

「弟子であるあなたが、未熟を恥じる必要は無いわ。過ちの一つ一つを、糧とするなら」と、雪。

「良い? モモ。あなたには何百回でも繰り返し言うけど」

「はい、師匠」

姿勢を直し、モモは雪の薫陶を聞く体制に入った。

「ツキカゲは、まず自分の身を守らなければならぬ」

当然だ。自分がやられてしまったら、他人を守る事など出来る訳も無い。

「でも、その為に仲間を犠牲にする事は勿論、誤射や暴発もツキカゲには絶対許されな

い。自分と、仲間と、そしてこの町の人達を守るようになるには、それだけの努力を  
しなさい」

そう言うとう雪はスマホガンを構えた。

「一秒で標的を落として」

今の雪の姿勢は緊張してはいるが、しかし無駄な力は体のどこにも入っていない自然  
体である。

いつ標的が現れるかと全身を強張らせていたモモとは、この時点で違っている。

出現するホログラフ。

雪は大きく前に踏み出して膝にもタメを作り、低い姿勢から正確な射撃で標的の胸に  
訓練弾を命中させた。

「まず、射撃姿勢は可能な限り小さく」

続け様に標的が二つ現れるが、雪は動き回りながらも見事な射撃でホログラフの胸部  
を撃ち抜いた。「おおっ」とモモが感嘆の声を上げる。

「それとモモ、あなたの仕草や動きを見てみると、あなたは標的の手足や視線を一つずつ  
じつと注目して、それで武器を持っているか、敵かどうかを判別、危険の有無を判断し  
ているわね？」

「は、はいそうです。師匠」

弟子の言葉を受け、雪は怒った様子は少しも見せずに首を横に振った。

「それではダメ。一点をじつと見るのではなく、ぼうつと全体を見るの。前者を中心視、後者を周辺視と言うのだけど……ことスポーツや武術に於いては、この周辺視が大切になってくるのよ」

武道出身の雪には「観の目」や「八方目」という言葉の方が馴染みが深い。

剣道の試合でも、上級者になれば相手の竹刀を注視するのではなく相手の目を見て、攻撃に対応するという。

野球の打撃にあつては、初心者バッターほどピッチャーの手先や肩、胴体や足下など体のあちこちを一つずつ注視して、投げるボールがどう飛んでくるかを予測しようとする。一方で一流のスラッガーは、投手の肘の辺りをぼんやりと見ているという。それによつて無意識の内により多くの情報を処理・理解して、ボールの速度や速さを把握し、タイミング良くバットを振るのだ。

「ほんのコンマ何秒かの違いだけど、この矯正で生存率が倍は変わつてくると思いなさ  
い」

「……はい。良く分かりました、師匠」

「よろしい。では、それらを頭に入れてもう一度最初から……」

そう、雪が言った時だった。



二人が手にしたスマホガンの通信機能が音を立てた。

「!!」

「はい、こちら半蔵」

「千代女だよ。鳳凰さんから、会談の申し入れが来た。その為の会議をするから全員集まって」

一時間後、基地内のミーティングルームには現在のツキカゲのメンバー全員とカトリヌが集結した。

全員集合を確認した所で、話を切り出したのは命だった。

「さつき、鳳凰さんから連絡があったよ。会談に応じる準備が出来たって」

既にツキカゲ側からは、鳳凰に交渉を持ち掛けている。

桃源の傭兵である鳳凰へ、任務失敗してツキカゲが保護している白虎を引き渡す代わりにこの空崎から退去もしくはツキカゲと敵対しない事を約束させるというものだ。

これに対して、鳳凰から持ち掛けて来た条件は3つ。

1, 会談場所は鳳凰が指定する事。

2, ツキカゲ側は2人までで来る事。鳳凰側も2人で対応する。

3, 会談が終わるまで他のツキカゲは、鳳凰達の周囲500メートルまでには近付かない事。

これらの条件を受け入れるなら細かい条件をすり合わせる為の会談に応じると鳳凰は言ってきた、ツキカゲ側もこれは了承した。

その上で、追って会談の方法を連絡すると言っていたのだが……

「その方法について、連絡があつたという事ね」

「うん。これを」

命が、ポケットから携帯電話を取り出した。

同時にカトリーヌが端末を操作して、モニターに空崎の地図を映し出した。地図上にはそれぞれ離れた場所に3つの輝点が表示されている。

「日は明日。1時間前にこの携帯電話に連絡を入れて、この3つの地点のどこかで話をするってさ」

「まどろっこしいですね? 場所ぐらい一つに絞れば良いのに」

不満そうに言うのは楓だ。

「いえ、これは敢えて場所を3つ指定して、こちらの戦力を分散させようという狙いね」  
場所を一カ所に絞るなら当然そこやその周辺を重点的に警戒するだろうし、指定しな

い場合は戦力分散の愚をツキカゲ側は避けるだろう。

鳳凰としてツキカゲを完全には信用していないのと同様に、ツキカゲも鳳凰を一から十までは信用していない。

会談の場所に何らかのトラップを仕掛けている可能性もある。それを考えると、ツキカゲ側としては鳳凰の狙い通りだと分かっているにしても、3つのポイント全てを警戒しない訳には行かない。

……と、そういう狙いが鳳凰にはあるのだろう。

「それに、テレちゃんの仕事も気になります」

今度は初芽が発言した。

「昔に誘拐事件で足取りが掴めなくなった友人と、何年も経って今、この時期に再会する……偶然にしては出来すぎている」

雪の疑問は当然と言える。

既に、ツキカゲ側に誰か内通者が居て、モウリヨウへ情報が漏れている可能性が上がつている。

もしテレジアが、内通者から初芽がツキカゲであるという情報が流れていて、それを確かめる為にモウリヨウから送られたエージェントだったとしたら……？

「私はテレちゃんを信じます。彼女は悪い子じゃありません。万が一モウリヨウの一員

になっていたとしても、きっと正しい道に戻れます。私が戻してみせます」

「師匠……」

「……確かに初芽なら出来るかも知れない」

「命も初さんを信じるよ」

「差し当たっては、私達も明日に話をする事になっていきますから。良く話し合ってみます」

「任せるわ。では、他の3カ所の警戒だけ……私と百地、千代女と風魔、五右衛門がそれぞれ行なう事にする。ただし五右衛門は、危険を避ける為に遠巻きの監視に留める事」

これは初芽がテレジアに会う為に五恵が単独行動になるので、尤もな条件である。五恵にも異存は無かった。

「分かりました」

「では全員、明日に備えるように」

翌日早朝、空崎グランドホテルの最上階スイートルーム。

「あの、師匠……」

「テレジア」

この日、テレジアは鳳凰に何時間かの自由行動の許可をもらうつもりだった。前日に初芽と待ち合わせの約束をしたからだ。だが、鳳凰と言葉が重なってしまう。しかしここはテレジアが、弟子という立場の遠慮もあつて鳳凰に譲った。

「今日、ツキカゲと会談を行ないます。あなたは私の供をしなさい」

「え……」

これはお願いではなく、鳳凰からの決定事項の通達だった。

元々、鳳凰はその為に空崎へ来たのだ。白虎を救出して、桃源に連れ戻す為に。

テレジアが初芽という旧友に会えたのはあくまで偶然であり、彼女個人の都合ではない。その為に、師匠である鳳凰の目的を邪魔する訳には行かない。

「……それとも、何か用事でも？」

「……あ、いえ……大丈夫です師匠」

「……………ふうん、そうですか」

視覚が欠如している鳳凰は他の4感が発達していて心音で嘘を見抜く。もう何年も寝食を共にしてきているテレジアだが、ついついそれを忘れてしまう時がある。ことに、隠し事などをした場合はそうだ。今回もそうだった。

「では30分後に出発しますから準備をして下さい」

「あ、はい。分かりました師匠……」

鳳凰が別の部屋に行ったのを見届けると、テレジアは肩を落とす。

初芽と話し合う事を、彼女も楽しみにしていたのだ。

だが、弟子として師匠の意向に逆らう事は出来ない。

それに鳳凰はそれなりに自分の意を汲んでくれる人だという事も、テレジアは知っている。白虎の引き渡しが終わった後でなら初芽と話す時間ぐらい作ってくれるだろう。

『初芽には悪いが、話すのは次の機会にさせてもらおう』

テレジアはそう考えて、交換していた初芽の連絡先へと電話を掛けた。

## 第11話 子守唄（ララバイ）は静かに奏でられる

空崎市の、とあるビルの屋上。

そこでは、ツキカゲの戦闘服に着替えた雪とモモが緊張した表情で双眼鏡を覗いている。

数十分前、事前に渡されていた携帯電話に鳳凰から会談場所を指定する連絡が入った。

鳳凰と直接接触して話をするツキカゲは2名までと決まっている。

その役目は、既に鳳凰と接触している命とその弟子である楓の二人に任されていた。

雪とモモの師弟は、鳳凰が指定した500メートル以遠ギリギリの位置から監視を行なうのが役目だった。テレジアと接触する予定となっている初芽と、ここからは離れた位置の会談場所候補を張っていた五恵は別行動である。

現在、モモが覗いている双眼鏡には私服姿で油断無く周囲を見回している命と楓の姿が見えている。今は指定された時間の5分前。二人は自分達に鳳凰が何処から近付いてくるのかを、警戒しているのだろう。

「ん!!」

すると、双眼鏡越しの二人の動きに変化があった。ほぼ同時に、一つの方角へと視線を向ける。

「現れたかしら?」

すぐ横の雪からも、同じものが見えているらしい。

モモは、双眼鏡を動かして二人の視線を追う。

「あれ?」

気の抜けたような声が出た。

てつきり以前にWasabiで見た鳳凰が、弟子を伴ってやってくるとばかり思っていた。

が、違っていた。

小学生ぐらいに見える女の子が二人に近付いてくると、何かを渡した。どうやら紙片らしいが……

渡された紙片を見ていた二人は、頷き合うと急ぎ足で歩き始めた。

もうすぐ鳳凰から指定された時間なのに、見ず知らずの女の子から渡された紙片（恐らくはメモ）を見てそこから離れるという事は……

「師匠、これは……」



すぐ隣の雪も同じ結論に達していたらしい。頷きを一つ弟子へと返す。

「ええ、鳳凰は用心深いようね。場所を変えたのよ……行くわよ」

二人とも、命と楓を追跡すべく移動を開始した。

10分ばかり移動して、命と楓の動きがとあるビルの前で止まった。

雪とモモは、先程と同じく二人やその周囲の様子が見渡せるビルの屋上に陣取った。

モモは持参していたバッグから初芽特製の指向性マイクを取り出した。これは50メートル離れていても会話の音声を拾えるスグレモノである。

二人の方向へと、マイクをかざすモモ。

「う、うん？」

だがモモの秀でた視力は、肉眼でも二人に妙な動きがあったことを捉えた。

同時に、かざしっぱなしの指向性マイクが電話の着信音を拾った。

だが携帯電話のものではない。

命と楓が立っているすぐ近くの電話ボックスの公衆電話が、いきなり鳴り出したのだ。

一方的にこちら側から掛けるだけというイメージが強いが、実際には公衆電話にも（悪用防止の為に公開されていないが）電話番号は存在していて、その番号に掛ける事で呼び出す事が出来る。

命と楓はそれぞれ顔を見合わせるが、楓が怪しい者の接近が無いかを確認するように電話ボックスの傍に立つと、命がボックスに入って受話器を取った。

十数秒ほど、命は話をしていたが……やがて受話器を置いて電話ボックスから出る。二人は二言三言話し合うと、また移動し始めた。

「師匠……またですよ」

「ええ、当然鳳凰も自分が会うのとは別のツキカゲが監視している事は想定しているだろうけど……それにしてもここまで慎重を期すとは」

雪の声にはどこか畏敬や感嘆の響きがあった。

野生の猛獣などがそうだが、強い者ほど相手の実力を測る為に慎重だという。桃源最強の武力は当然の事、この細心さも鳳凰が最高の傭兵たる所以なのかも知れない。

「どうしますか、師匠？」

「……これ以上、ぴったりと追跡しては、逆に鳳凰の方に私達の存在を発見されてしまう危険があるわね。やや間を置いて、二人を追いましよう」

裏でこんな一幕を挟みつつ、命と楓は指定された場所へとやって来た。今度は町中の公園である。

ベンチの前に立つ二人は、油断無く視線を配る。今の所、視界の中に鳳凰の姿は無い。「待ち伏せていると思っただけ、まだ来てないみたいだね？ それとも少し距離を取っ

て様子を見ているのかな？」

「どっちにしても、こんな人に振り回すなんて、馬鹿にした話です!!」

いい加減焦れた様子の楓がむすつと頬をふくらませてぼやく。

その時だった。

「それは申し訳なかったですね。でも、私もこういう時は一応、相手を疑ってかかる事にしているのですね」

「!!」

声が掛かった。

反射的に二人が振り返ると、すぐ傍の木陰から、鳳凰とテレジアが姿を現した。

「あなた達は……」

「良く来てくれましたね。命さんと……もう一人……」

「あ……鳳凰さん。それにそっちは……」

「ああ、こちらは私の弟子兼秘書で……」

「テレジア・レイです。初めまして」

「……」

一礼して自己紹介するテレジアだったが、ツキカゲの二人は心中穏やかではない。

いくつかの推理材料からテレジアはモウリヨウの関係者だと考えていたが、実際には

鳳凰に付いてきていたのだ。ツキカゲ側の予想は今回は外れた事になる。

「……さて、それじゃあ白虎ちゃんの引き渡し条件について話し合いを……」

命はそうした内心の動揺が表情に出る事を完全に抑えるのに成功すると、話を切り出そうとした。この辺りは師匠格になるまでのスパイとしての経験と訓練の賜物である。

「……その事なのですがね、命さん」

「うん？」

鳳凰が、盲目故に閉ざされたままだが視線を命から少し外して、申し訳なさそうに言った。

「折角来て下さって申し訳ないのですが……どうやらそれどころではなくなつたようですよ」

「？」

「それはどういふ……」

二人は、まだ気付いていないらしい。すぐ傍らのテレジアも同じだ。

これは盲目であるが故に他の四感覚、とりわけ聴覚が発達している鳳凰であるからこそ状況をいち早く把握出来たものがあるのだ。

「何やら、大変な事が起こっていますよ。町中でね」

鳳凰の言葉は当たっていた。

空崎市の風下に当たたる一角で、尋常ならざる事態が発生していた。

「ワシ等は愛しあつとるんじゃ!!」

「聞いてくれ!!」

男二人が半裸で抱き合っていたり。

「いーち、にーい、さーん」

駅でいきなり電車待ちの学生達が腹筋運動を始めた。

トラックが暴走して店に突っ込んだり。

バットや鉄パイプを持った暴漢が銀行に押し入ったり。

とても偶然の一致とは思えない事件が、一斉に起こったのである。

「……一体何が起こっている……?」

カトリーナと初芽から同じ連絡を受け、雪は視線を眼下へと移した。

高所から見てみると良く分かる。

ここからやや離れた町の一角で、明らかな異常事態が頻発している。

「五恵ちゃんとも連絡が取れないし……この騒ぎに巻き込まれた可能性が……」

「こちらでも情報を集めておくから、そちらは町の暴徒への対応を……」

「半蔵、了解。オーバー」

雪は通信を切ると、弟子へと向き直った。

「師匠……」

「百地、鳳凰の監視任務は一時中止。私達は混乱の收拾に当たるわ。着いてきなさい」

「はい、師匠!!」

「……はい、はい。千代女、了解」

数分のラグを置いて、命にも同じ連絡が入っていた。

「……師匠、これは……」

判断に迷った様子の楓に頷きを一つして返すと、命は鳳凰に向き直った。

「ファン……いえ、鳳凰さん。折角来てもらって申し訳ないけど非常事態が起こってい

るみたいだし……命達ツキカゲは町を守る為に動かなくちやなんだ。話し合いは、また機会を改めて……」

「……命さん、その件ですが私もお手伝いしましょう」

「……えっ?」

「いいの?」

ポカンとした表情になった二人のツキカゲに鳳凰は穏やかに微笑し、頷く。

「ええ……これはツキカゲや桃源の利益・関係云々の前に人道問題ですからね。協力させていただけますよ」

「世紀末……」

「だ、大事件だよ……」

学校からの帰り道だった畠山結愛と北斗風は、ほんの数分前まではサスペンスドラマや映画の中でしか見た事のなかったような光景が現実に分達の眼前で繰り広げられているのを目の当たりにして、顔を真っ青にして身を寄せ合っていた。

道行く人々が、手に手に鉄パイプやバット、ゴルフクラブなどを持って目に付くもの

を手当たり次第に破壊し始めたのだ。

仕事や家事のストレス解消にしてはちと派手すぎる……などと、馬鹿な感想が結愛の脳裏によぎった。

と、すぐ近くで鉄パイプをガードレールに叩き付けていた男性と目が合った。

「……………ひっ……………」

間近で見えて分かったが、男の目には全く意志の光とか正気とでも形容すべきものが見られなかった。焦点が合っておらず、瞳孔が開いている。風は何年か前に、ゾンビ映画を見て夜に一人でトイレに行けなくなった事を思い出した。

震え上がって動けない二人の前に、風船のように恰幅の良い人影が立ちはだかった。

空崎高校OBで、商店街の肉屋「肉のモロボシ」の店主である諸星明である。

手には、中華包丁を持っている。

「お、俺の店の肉には、指一本触れさせねえ!!」

声を上擦らせて身構えるが、やはりゾンビ映画さながらの相手は怖い。

男が鉄パイプを振りかぶった。

「ひえっ……………」

明は思わず両手で体を庇う。

「……………」



だが、いつまで経っても何も起きなかった。

「……………」

恐る恐る目を向けてみると、眼前の男は長物を振りかぶって、今にも振り下ろそうと……しているその姿勢のまま、固まってしまっていた。

「……………あ、あれ?」

まるで、一流のパントマイマーの如しである。

用心深く近付いた結愛が、さっさと男の視線を横切るように手を動かしてみようが、目線には何の動きも無かった。それどころか瞬きすらもしていない。この男の時間だけが止まってしまっているようにも思えた。

「固まっちゃってるよ……………」

3人が周囲を見渡すと、固まっているのは眼前の男だけではなかった。

一帯の暴徒が、ある者はゴルフクラブを叩き付けた体勢のまま。またある者は勢いを付けようと片足を上げてテイクバックをした姿勢のまま、ぴつたりと止まってしまっていた。

「こりやすごいねえ……」

「以前に時間が飛んだように思ったのは、こういう事だったのね……」

結愛や凧、明がいきなり石像のように硬直してしまった暴徒達をつついたりくすぐったりしているのを睥睨出来るビルの屋上で、命と楓は感心する他は無いという顔で双眼鏡を覗き込んでいた。

前にエモ・パチーノのアジトを襲撃した時、いきなり時間が5分間も飛んだように感じた事があつたが、それは違つていた。

実際にはツキカゲ全員が5分間も固まつてしまつていたので。

それを外から見てみると、今の暴徒達のように見えたのだろう。

自分達も、敵地でまるで木偶の坊のようになってしまつていたに違いない。あの時、もしモウリヨウの新手が現れたり鳳凰が敵対勢力だった場合は、ツキカゲは一網打尽にされて全滅させられていた事になる。そういう意味では紙一重、危機一髪だった。

今更ながらに空恐ろしくなつて、楓はほつと一息を吐いた。

「こんな技を使うなんて……」

畏敬の念を込めて、命が呟いた。

「これが師匠の、サイレントララバイ」

テレジアが、自分の事のように自慢げに言った。

鳳凰はそのすぐ隣で、バイオリンを奏でている。いや、奏でているというのは語弊があるかも知れない。

弓を動かしているが、そこからは何の音も出ていない。弦の擦れる音すら聞こえない。

「要するに、師匠のバイオリンから発せられる音を聞いた人間を催眠状態にして、意識を飛ばしてしまうのさ。バイオリンから出る音は人間の可聴域を超えていて、聞こえている事に気付かない。意識が戻っても、意識を失っていた事にも気付かない。更にはこうして私達が無事である事からも分かるように、位置が分かっていたら音に指向性を持たせて、任意の人間を対象から外す事も出来るのさ」

「……喋りすぎですよ、テレジア」

やや早口に捲し立てる弟子を、少しだけ厳しい口調で鳳凰はたしなめた。

「す、すいません師匠……」

「……いや、それにしても凄いや」

と、命。

聞こえている事にも気付かせずに意識を奪う催眠音波。射程は音の聞こえる範囲およびその半径数百メートル。

眠気や頭痛など前兆が無いから、事前に察知する事は人間にはまず不可能。そして一

度決まってしまうえば、後は対象を煮て食おうが焼いて食おうが思いのまま、生殺与奪を手にしてしまえる。

鳳凰に対して何の知識も無い人間が、初見で防ぐ事など出来ないだろう。生きるか死ぬか、殺すか殺されるかの実戦では同じ相手と二度戦うケースは極端に少ない事を考えると、事実上、無敵の技と言っても過言では無い。

前に白虎が、ツキカゲ最強の五恵が何百人居ても鳳凰には勝てないと言っていたのはこういう事だったのだ。

「……さて、次はどこですか？」

「ああ、次は……」

と、その時命のスマホが着信音を鳴らした。

「はい、こちら千代女……」

数秒して、命は表情を引き攣らせる。

「えっ……五右衛門が……!？」